

「魂」の旅（その二）

— 永遠の相を見る —

中 村 弘

はじめに

A氏 — こちらが、先日お話した娘の主人の、Dさんです。

D氏 — (ニコリとして) はじめまして。何も分かりませんが、よろしくお願いします。

筆者 — ようこそお出で下さりました。どうぞ、こちらへ。(一部省略)

(D氏に) 今回は、Aさん(文系の女性)には引き続いてお引き受けいただきましたが、Bさん(理系の男性)には体よく断わられましてね。「もう勘弁してくれ。この前はうまく乗せられて、余計なことまでしゃべってしまった」などとおっしゃって、固辞されたのですよ(笑声)。そこで、Aさんに頼んで、代りに来ていただいたわけですが、いわゆる「精神世界」に関心がおありだそうですね。ちょうど、そのような方を探しておりましたので、一つよろしくお付き合い下さい。

D氏 — いえ、私はただ、本が好きなだけでして。「精神世界」だなんて、そんな大げさなものではありません。話題のものを少し読んだ程度なのですが、この前お書きになったもの(「文芸と思想」67号、「魂の旅 — 人間はどこから来て、どこへ行くのか —」)を母から見せていただきまして、ぜひお話をうかがいたいと思ったものですから。

筆者 — 有難うございます。特に、どのようなことに関心がおありですか。

D氏 — そうですね。やはり、私たちはこれからどうなるのか、それが一番気がかりです。論文の最後でおっしゃっていた「新しい地球」のことですが、私たちが地球に残るかどうかは、私たちの選択次第とありました。もしそうであるならば、何をどう選択すればよいのでしょうか。まったく見当もつきませんので、もう少し具体的に教えていただけたらと思うのですが。

筆者 — 分かりました。こう言っただけですが、前回は何人かの方から、「面白かった」などと珍しくお誉めの言葉を頂いて、心中うれしく思ったのも確かですが、その一方で、果してこれでよかったのかという思いもありました。

A氏 — 私から見れば、まだかなり難しかったわ。大ていの方は、もっともっと易しくした方がいいんじゃないかしら。

筆者 — はい、はい。今回はどうやら、「何でも解説篇」になりそうですね。あまり得意ではないのですが、閉店まぎわの出血サービスという所でしょうか。

この「パートII」は、実は最初の予定には入っていませんでした。基本的なことは、最低限申し上げたつもりでしたので。ところが、その後Aさんから、色々と分からないことが出てきたと言われたものですから。

A氏 — 一種のカルチャー・ショックでしょうかね。これまで、専門バカと言われるような学問の狭い世界に生きて、家では子供や孫の世話や年寄りの看護にかまけ、ふと気がついてみたら、本当は何も知らなかったことが分かったのですよ。それで、妙なアセリを感じて、還暦を過ぎてからの「再教育」というわけです。

以前は、娘とDさんが、ノストラダムスがどうの、人類滅亡がどうのと話しているのを聞いて、何を馬鹿なことを言ってるのかと思っていたのですけどね。でも、いまの世界の状況や地球の有様を見ると、どうみても只事ではないでしょう。自分のことはともかくとして、孫や子供たちのことを考えると、心配で心配で……。

筆者 — かねがね、すべての人に気づいてほしいと思っていたのですが、やっと、お分かり願えましたか。しかし、問題はこれからなのです。

何事でもそうですが、ある事を学ぶと、必ず新しい疑問が次々と出てきます。しかし、それを解決するのが成長ということですから、この「意識の拡大」は、どこまでも続けなければなりません。そして、そのあげくに、人間は「神になる」わけですが、それが精神の本性なのです。それ故、自分自身の成長のために、分からないことは何でも、外聞を恐れずに聞くべきでしょうね。

1 子供になること

筆者 — 確かに、初めは誰でも、自分の「ストリップ」には抵抗がありますが、ご存知のように、「天使」は一糸もまとっておりません。そして、「天使」に近い「子供」もまた平気で裸になりますが、それが人間本来の、あるべき姿なのですね。それを示したのがエデンの園のアダムとイヴの姿です。そこで、

人類の教師イエスは、こう教えました。《Considérez comment croissent les lis ; ils ne peinent ni filent》(Traduction du monde nouveau)：「百合の花がいかに育つかを思へ。そは勞せず、紡がざるなり」(ルカ伝、12章27節)。アシジのフランチェスコは、その理想を実現して、ついには大地に裸で横たわって死んだそうですよ。

D氏 — 確かに、聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥とも言いますからね。では、さっそく実行に移して、お聞きしたいと思いますが、なぜ「ユリの花」なのですか。それから、その二つ名のフランチェスコさんとは、どなたのことですか。どこかで聞いたようにも思いますが、思い出せません。

筆者 — いいですね、その呼吸です。いいと思ったことは、すぐ実行しましょう。もはや逡巡している時ではありませんから。

中には、その反対に志操堅固の鎧を着て、人の話は聞かず、自分の意見は絶対に変えない人もいますが、そのような方は、うぬぼれと言うよりも、変節を嫌う気持が強いのかも知れませんね。

D氏 — (笑いながら) 名前を出すのもどうかと思いますが、私たちの世代からすると、Bさんの頑張り方は、驚異的としか言い様がありませんね。

筆者 — いっそ、「感動的」と言った方がいいのではありませんか(笑声)。私たちの若い頃は「政治の季節」でして、大学に入学した年(昭和34年)は、日本中が「安保反対」で揺れ動いた時でした。極端に言えば、その頃は「真中」は許されず、すべての人を「右」か「左」に分けて考え、しかも左翼にあらずんば知識人にあらず、というのが時代の空気だったのです。ですから、左翼か右翼ではなく、両翼を使って「上」(カミ)へ飛ぶことなどは、誰も考えなかったのではないのでしょうか。本当は、おシャカ様の言うように、「中道に真あり」が正しくて、左か右ではなく、「左の自分」と「右の自分」を仲なおりさせて、それによって「上」へ到らねばならなかったのです。人間には本来、あらゆる働きをするエネルギーが具わっていますから、そのエネルギー同志が衝突すると、全体の力が弱まることは明らかでしょう。従って、それぞれのエネルギーが全体のために協力する時に、その最大の力が発揮されて、人間は更に上の段階へとレベル・アップするのです。これが「進化の方程式」なのですが、人間はそのような、あらゆる働きをするエネルギーを持つが故に、しばしば間違えることも避けられません。そこで、気がついたらすぐ改めることが何よりも大切になるわけですし、これは今では、かなり理解されてきたのではないのでしょうか。以前は、Bさんのように主義主張に殉ずるカッコいい方が多かったのですが、いまや「絶滅危惧種」かも知れませんね(笑声)。

勿論、人に聞くと言っても、やるべきことを何もせずに教えてもらうという

ことではなく、自分の努力が大前提であって、その上での話であることは言うまでもありません。人の話に耳を傾けるのは、自分が行きづまった時に、前進のきっかけをつかむためなのです。ですから、議論で相手に勝つことではなく、自分自身の成長が、私たちの最重要課題になります。そして、そのためには子供のように素直でなければなりません。実はこの「子供になること」こそが、先ほどご質問があった「新しい地球への入り方」の、答えそのものなのです。従って、これは大変重要なテーマですから、今ここで、少し考えてみましょう。「ユリの花」と、「アシジのフランチェスコ」のことは、その後で答えしますから。

では、その「子供」とは一体いかなる存在なのでしょう。例えば、アンデルセンの童話に、有名な「裸の王様」がありますが、どなたもよくご存知のように、「子供」だけが真実をありのままに見たわけですね。従って、この話は、「大人」に対する真に痛烈な批判に外なりません。それと同じように、「子供」と「大人」を鋭く対比させたのが、サン・テグジュペリの「星の王子様」なのです。これを子供向けの本と思っている人がいますが（日本では「少年文庫」に入っている）、彼（サン・テグジュペリ）は、かつて「子供」であったことを忘れた「大人」の人たちに、自分を思い出してもらうために書いたのです。そして、それは多くの人に理解されて、世界で第三位の超ベストセラーになりました（一位は「聖書」で、二位が「資本論」）。要するに、心が屈折する前は、すべての人が「子供」だったのです。そこで、「大人」とは、「ゆがんだ子供」と定義できるのではないのでしょうか。しかし、子供は学ばねばならず、学ぶと「ゆがむ」のですから、なかなか難しい所ですが、最終的には、経験をつんだ本物の「大人」である「神」にならねばなりません。

少し先回りしましたが、以上のような問題の源というか、中心に位置するのが、イエスが弟子たちに教えた次の言葉なのです。《En vérité je vous le dis, si vous ne vous retournez pas et ne devenez pas comme des petits enfants, vous n'entrerez absolument pas dans le royaume des cieux》：「まことに汝らに告ぐ。汝ら心変わらざれば、幼子のごとくならざれば、決して天の王国に入ることもなからん」（マタイ伝、18章3節）。分脈から考えて、分かりやすく卑俗な言葉で表現すれば、「馬鹿になれ」ということでしょう。この「天の王国」が間もなく地に降りて、「地上天国」（新しい地球）が実現するわけですが、それが何度も申し上げてきた「地球の次元上昇」に外なりません。前論の最後で、その入口の「門」までご案内しましたが、それは、かつては「狭き門」と言われた難関であり、イエスの教えはすべて、ここを通るためのものでした。Aさんは、この言葉はご存知ですね。

A氏 — アンドレ・ジッドの「狭き門」は、昔読みましたが、もう憶えていません。

筆者 — 有名な「山上の垂訓」で述べられたことです。《Entrez par la porte étroite ; car large et spacieuse est la route qui mène à la destruction, et nombreux sont ceux qui entrent par elle》：「汝ら狭き門を通るべし。何となれば、滅びに至る道は大きく広々として、そこを通る者は多ければなり」（マタイ伝、7章13節）。ところが、いよいよの土壇場になって、図らずも情況がすっかり好転して、いまや望めば誰でも、「新しい地球」へ行けることになりました。

D氏 — それは、どうしてですか。

筆者 — 簡単に言いますと、「地球」が期限までに、そのカルマの精算を完了して「次元上昇」することは不可能と分かったために、特例として「カルマの法則」の撤廃と、「恩寵の法則」の導入が決定されたからなのです（銀河カウンスル作戦本部とゾーブ・ジョー著「E T地球大作戦」）。何のことかよく分からないと思いますが、そのようなことから、「後は皆さんの選択の問題です」と、こう申し上げました。

それ故、本気で希望する方は、たとえ完全に「子供になること」ができなくとも、心から行きたいと願って下さい。それは非常に簡単なことでありながら、一部の方（利巧な人）には、かなり難しいかも知れません。また、中には行きたくない人もいるかも知れませんが、地球では、これほどのチャンスはもはやなくなり、今後は他のどこで何時あるかも分かりませんから、本当は騙してでも連れて行くべきなのでしょう。しかしながら、以前にも申し上げたように、ここは自由意志の領域なのですね。だからこそ、地球では、この惑星と地上の生命を助けにきた人たち（聖者）さえも殺すことができるのであり、それは最大限尊重されねばなりません。それ故、十字架にかけられたイエスは激しい苦悶の中で、「神」に向かってこう言ったのでした。《Père, pardonne-leur, car ils ne savent pas ce qu'ils font》：「『父』よ、彼らを許し給へ。何となれば、己が何を為したるかを知らざればなり」（ルカ伝、23章34節）。そして彼らもまた、気の遠くなるような長い「旅路」のはてに、本当の「大人」になって、すべての親である「神」の元へと帰って行くのです。

以上のように、今回も結論が先になりましたが、これは好みのスタイルというより私の流儀ですので、その点をご容赦下さい。

A氏 — あら、そうだったかしら。前回確か、Bさんが「魂とは何か」と聞いた時に、「難しい問題なので、順を追って様々な角度から見ていく」といっていませんでした（?）。

筆者 — (笑いながら) 確かにそう言いましたがね。実は種を明かしますと、あれは一種の、構成上のカラクリだったのです。本当は最初に申し上げた、「『魂』は肉体という『衣』をまとっている」、あるいは「肉体は『魂』が乗る『船』である」が結論であって、後はその説明でしかありません。悪しからず。

なお、「子供」のことで一言つけ加えますと、「星の王子様」の原題は《Le Petit Prince》であって、この《Prince》はラテン語の《princeps》(第一人者、君主、帝王)が語源であり、フランス語では「公国(principauté)の統治者」のことです。従って、彼は自分の小惑星(B-612番)という「公国」の「統治者」になるわけですが、これに「子供」を示す《Petit》(小さな、かわいい)という形容詞がつきました。「大人」(grandes personnes)との対比ですね。それ故、彼は「子供の王様」であって、「王様の子供」ではありません。しかしながら、前論で申し上げたランボオの「地獄の季節」と同じく、一度定着したものは簡単には変わらないでしょう。

まあ、この類のことは数えきれぬほどあり、また小さなことでは大して問題にもなりません。中には人類の進歩に大きな影響を及ぼす、重大な事柄もありますからね。例えば、ガリレオがコペルニクスの地動説を認めた宇宙論(「天文対話」)を発表した時に、カトリックが彼を異端審問にかけて断罪したのは十七世紀前半(1633年)でしたが、カトリックが正式に過ちを認めたのは最近(1992年)のことです。

A氏 — 何ででしょうね。男性のそんな頑固さは、とても理解できませんけど。

筆者 — やはり面子と組織維持のために、政治的配慮を優先させたのでしょうね。同じようにして、フランス史上とりわけ有名な、救国の聖処女ジャンヌ・ダルクが処刑されたのは十五世紀前半(1431年)ですが、彼女が本来の名誉を回復して聖人の列に加えられたのは、実に二十世紀に入ってからのことでした(裁判での汚名は、一四五六年の再審理で晴らされた)。残念ながら、これでは間違いをすぐ改めたとは言えません。いざという時は、大きな組織ほど小回りがききませんから、これから先が懸念される所です。自分たちは真っ先に救われると思っているのかも知れませんが、例えば、生まれた時に頭に少々の水をたらすと、なぜ救われて、永遠の命が得られるのでしょうか。

D氏 — そう言えば、確かに変な儀式ですね。

筆者 — 「バプテスマ」(洗礼)の語源はギリシャ語の《baptizein》であり、「水に沈める」ということです。ですから、「バプテスマのヨハネ」がヨルダン河で大人に行なったように、全身を水に沈めるのが本来の形なのです。それは、日本の「素戔鳴尊」(すさのおのみこと)が死者の「黄泉国」(よもつくに)から

戻って、「天の安河」（あまのやすのかわ）で「みそぎ」（水濯ぎ）を行ったのと同じであって、「死に至るけがれ」からの「甦えり」を象徴する儀式に外なりません。つまり、「けがれ」とは「気枯れ」（気は生命エネルギーのこと）であり、命の源の「水」によって蘇生するのです。それを事もあろうに、文字どおり「命の水」である羊水から出たばかりの、けがれなき無垢の赤子に水道の汚染された水をかけて、一体どうしようというのでしょうか。

A氏 — でも、聖書と古事記が、関係があるとも思えませんけど。

筆者 — それが大ありなのです。明治の初め頃（1875年）、あるユダヤ人（N. マックレオド）が著書の中で「日ユ同祖論」（日本人とユダヤ人が同じ祖先を持つこと）を発表し、それが「ユダヤ大百科事典」に取り上げられて、世界中のユダヤ人を驚かせました。日本では神道関係者が注目しましたが、一般の殆どの方は、ユダヤ民族も聖書も知りません。ですから、話を聞いても失笑するだけですが、彼らユダヤ人の多くは、日本人が兄弟であることを確信しているのです。例えば、アインシュタインは日本に来た時、その「証拠」を様々な所に見出して、「神がこのような国を用意してくれたことを感謝する」という趣旨の言葉を残しました。この言葉は、旧約聖書の「イザヤ書」の予言と、その実現であるユダヤ人の「ディアスポラ」（民族離散）の歴史を知らないと、分かりにくいかも知れませんが。

A氏 — それにしても、何で日本人とユダヤ人が兄弟なのですか。

筆者 — 要点だけを言いますと、歴史上有名な、「失われた十支族（部族）」というのがありますね。ヘブライ王国最盛期のソロモン王の死後、十支族の「イスラエル王国」と二支族の「ユダ王国」に分裂して、「イスラエル王国」の方は紀元前七二二年に、世界史上最初の大帝国の「アッシリア」に滅ぼされました。この時に強制移住させられて、やがて世界の各地へ散って行ったのが、いわゆる「失われた十支族」なのです。東へ向かったグループは中国まで達しました。また近東から海路を取れば、モンスーンに助けられて、数十日で日本に着くそうです。いずれにせよ、彼らがその後日本に入ったことは、様々な痕跡から間違いありません。

D氏 — 例えば、どんなことですか。

筆者 — 一つだけ挙げますと、日本の「神輿（みこし）」（神の乗物）は、あの「契約の箱」（モーセがシナイ山で神と結んだ「シナイ契約」を記した「律法」を収めた櫃で、これを安置した幕屋が後に神殿となる）を型取ったものであることは明らかでしょう（「律法」の原語のトラーは「神の教え」の意）。この「箱」は、両側の金具に通した二本の棒で運ばれるのです。その詳細は「出エジプト記」（25章10節以下）に書かれていますが、上部の「純金の覆い」

の両端に、跪（ひざまず）いた二体の「金のケルビム（天使）」を向い合わせに乗せて、その四つの翼を前方に広げて「箱」を守る形に作るように指示されています。私見によれば、後にこれが様式化されて、いわゆる神社仏閣調の反りかえった屋根になったのではないのでしょうか。「神輿」の屋根に鳳凰などが飾られることは、よく指摘される所です。

D氏 — 何とも驚いた話ですが、本当ですか。

筆者 — 彼らユダヤ人は、祭日などに、神への捧げ物として、自分の動物（牛や羊や山羊など）の頭に手を置いてから、ほふられた動物を祭壇上で「焼燔（しょうはん）」（火で焼いて肉をあぶること）しました。そこで「燔祭」とも言われるのですが、その漢字の「祭」の「月」は犠牲の「肉」を表わし、「又」は「右手」であり、「示」は「祭壇」を示すのです。言うまでもなく日本の縄文人の主食は木の実などで、鹿や猪も食べましたが、羊の飼育は明治以降ですから、この「祭」は日本古来のものではありません。また、日本語の中にはヘブライ語がかなり入っていて、一説によれば、「神輿」をかつぐ時の「ワッショイ」も古代ヘブライ語だとか。

A氏 — 確かに興味深いことだと思いますが、先ほどの、キリスト教（カトリック）が面子にこだわって政治的配慮を優先させたという所まで戻っていいですか。身近な例ですけど、「〇〇湾」の水門開閉問題でも、為政者が何故あれほど頑（かたく）なのかな全く理解に苦しみますが、これも同じことなのかしら。

筆者 — 支配者が愛ではなく権力で支配する時は、すべて同じですが、政治は、さらに利権がからみます。特に日本の社会はこの古い体質が強く残っていて、「セイさん」（政）と「カンさん」（官）と「ギョウさん」（業）と「ヤアさん」が仲よし「四人組」となり、日本はその利権構造のために今や「デフォルト」（国家破産）寸前に至りました。確かに「椀」（○）の「蓋」（○）を開けなければ食べれませんが、「乾燥湾」だけの問題ではありません。これらのことはタブー視されて、日本人には書けませんので、米経済誌「フォーブス」の東京支局長（現在はアジア太平洋支局長）のベンジャミン・フルフォード氏が、「日本がアルゼンチン・タンゴを踊る日」で明らかにしています。アルゼンチンは、二年前の二〇〇二年に「デフォルト」しました。そして、日本が「二の舞を踏む日」は、目前に迫っているのです。しかしながら、永遠の世界から見れば、彼ら「四人組」も「創造」のための「破壊」という大切な役目（「ひふみ神示」は「悪の御役」と言う）を果しているのであって、そこにはこの世の善悪は存在しないのですが、それはまた後ほど触れることにしましょう。

では、最初のご質問に戻りましょうか。Aさんはご存知と思いますが、アシ

ジは中部イタリアの地名で、フランチェスコは中世の十二世紀（1182年）にここで生まれた有名な聖者です。彼はイタリア人なのに「フランス人」（フランチェスコの本来の意味）という、不思議な人物です。一般にサン（聖）・フランチェスコないしフランシスコ（英語読み）と呼ばれていますが、完全な「清貧」を宗とした「フランシスコ会」（修道会）の創立者として知られており、アメリカの「サン・フランシスコ」の由来にもなっていると言え、思い出す方も多いのではないのでしょうか。

D氏 — 確かに、どこかで聞いたような気がします。

筆者 — もう一つの、「なぜユリの花なのか」は、少々難しい問題ですね。聖書の「ユリ」が何を指すかは古来諸説があるのですが、その原語のヘブライ語の「シューシャン」(shushan) とギリシャ語の「クリノン」(krinon) は、チューリップや、アネモネ、ヒヤシンス、アイリス、グラジオラスなど、広く様々な花を意味する言葉だと言われます。ですから、「ユリの花」と言うよりも、「野の花」と言った方がよいのではないのでしょうか。彼（イエス）は野辺の草花に目をやりながら、人々に教えたのです。

2 精神世界とは

A氏 — では、私も言い出しっぺとして、いさぎよく脱がなくてはね。

（D氏に）私、Bさんほどじゃないけど、こちらの方面（精神主義）はサッパリで、あなたが言ってた「精神世界」も、本屋さんにそんなコーナーがあるのは知ってたけど、うさんくさそうに、横目で見て通りすぎてただけでしょ。それって、どんな「世界」なのか、この際ちゃんと教えて。

D氏 — そんなに急に言われてもですね、何て言ったらいいか、心臓ドキドキで……。要するに、この前ちょっと言った「輪廻転生」や、「人類の未来」（予言）などを扱う分野で…、それから「ニュー・サイエンス」とか、「UFO」とか、「宇宙」とか、「神」なども入ってくると思いますが、どうですか（と言って、筆者を見る）。

筆者 — ええ、そうですね。私も詳しくは知りませんが、この言葉は、本来は“Spiritual World”の翻訳語であって、日本では一九七〇年代の後半頃から使われ出して、「新霊性復興運動」（精神世界研究家の島蘭進氏の命名）のグローバル化の中で、アメリカの「ニュー・エイジ（ムーブメント）」（この運動のアメリカでも展開）とほぼ対応しながら、日本的なもの（古神道など）も含めて広まったもののようです（サンマーク編集部「精神世界が見えてくる」など）。

A氏 — その、「新靈性復興運動」て何です。

筆者 — では、それを簡単にご紹介しながら、質問があれば、「ウインドウ」を開いて説明することにしましょう。

先ず、すぐ前の六〇年代に、ヒッピーに代表される「カウンター・カルチャー」(現代社会の文明や体制と対立する生き方の若者文化)が興りました。それは更にその前の、五〇年代の「ビートニク運動」(東洋思想や日本の禅に関心を示した)や、西洋の新旧さまざまな神秘思想や、新しい心理学の「トランスパーソナル (心理学)」などを統合した、反物質主義の、複雑で混沌とした潮流です。

A氏 — 「トランスパーソナル」って、人 (パーソナル) を超える (トランス) ということかしら。心理学は、人間の心理を研究する学問かと思ってましたけど。

筆者 — それまでは確かにそうだったのですが、これはユング心理学を発展させた、更に画期的な新しい分野で、精神科医のスタニスラフ・グロフ博士(チェコ出身で、六〇年代のアメリカのニューエイジ運動を代表する研究者)が生みの親となった現代心理学です。

彼によれば、若い医学生の時に、人間の意識は脳の複雑な神経生理の産物であると教えられたが、その後の研究の結果、物質世界こそ意識の産物であり、物質が意識を作るのではないと確信するに至った。精神は自覚した意識であって、より上位の概念、つまり宇宙につながる概念である。そこで人間は、自我を超えた、つまりトランスパーソナルな体験ができるのである。かくして、意識をトランスパーソナルに広げることによって、自分がより大きな存在の一環であることが分かるようになる、ということです(同書の「インタビュー」記事より)。

D氏 — それはまた、ブッ飛んでいて、すごいですね。

A氏 — 何か、Cさん(筆者)のおっしゃっていることと似ているみたいですが、そこまで言われると、まだちょっと付いて行けそうも……。

筆者 — かつてコペルニクスが、それまでの天動説に対して地動説を唱えた時に、多くの人がそのように感じたことと思います。それと同じように、今現在、これまでの「物質が意識を作る」という考え方を逆転させて、「意識が物質を作る」と考えることは、正にコペルニクスの発想の転換と言えるでしょう。今や人類は、次なる飛躍の時を迎えたのです。

これについては、いわゆるチャネリング情報の中でもよく知られた一つの、ジェーン・ロバーツ氏(アメリカの詩人で小説家)が伝えた「セスは語る」(セスは高次元の存在)を参考にして下さい。例えば、「一見知覚されたように思

われる事物と知覚者の間に、実質的な区別はありません。多くの意味において、知覚された事物は、知覚者の「広がり」あるいは延長であると言えます。このことは奇妙に聞こえるかもしれませんが、すべての作用は観念的です。極めて単純化した説明をすれば、『思考が現実を創造する』のです。そして思考の創造者は物体を知覚するのですが、本人には一見自分と別々に在るように見えるその物体と、自分との繋がりが理解できないのです」（紫山訳）など。セスは、どうやらデカルトを念頭に置いているようですね。

元に戻ります。次の七〇年代に入ると、理論物理学者のフリッチョフ・カプラ氏が「タオ自然学」を著して、東洋思想と現代の量子力学が一致することを示し、世界的なベストセラーになりました。かくして、西欧科学の物質主義の限界を克服しようとする「ニュー・サイエンス」の道が次第に開かれて…

D氏 — ちょっと、すみません。その、東洋思想と現代物理学が一致するというのは、どういうことですか。

筆者 — 古来の東洋思想（老荘思想）では、究極の真理つまり宇宙の法則を、「道」（タオ）と呼びました。それが、あの「万物一体」という世界観です。ところが、現代の最先端の物理学が到達したのが、何とこれと同じ「宇宙の法則」（タオ）なのでした。前論で申し上げたように、「巨視的には、すべてが既に言われている」のです。カプラ氏は、科学が実験と理論によって解明したことに基づいて、その法則を「万物の根本的合一性」と呼んで、「それは原子のレベルでも明確だが、素粒子の領域にまで掘り下げていくと、なおはっきりする」（吉福、他訳）、と明言しています。

次いで八〇年代に入って、ライアル・ワトソン氏の「生命潮流」が出版されると、彼はその「百匹目のサル論」によって、「ニュー・サイエンス」の代表的科学者と目されるようになりました。

A氏 — 「百匹目のサル」は前に聞いたように思いますが、何でしたっけ。その頃は関心がなかったものですから、すっかり忘れてしまって。

筆者 — Dさんは、ワトソン博士の「生命潮流」をご覧になりましたか。

D氏 — いえ。私が読んだのはそういう本格的なものではなくて、ジェームズ・レッドフィールドさんの「聖なる予言」とか、「前世療法」で有名なブライアン・ワイズさんの「魂の伴侶（ソウルメイト）」などで、時代的にももう少し新しい所です。一番新しいのは、ウォルシュさんの「神との対話」でしょうか。それから勿論、先ほどのノスさん（ノストラダムス）も読みましたが、これは誰でも読んでいますから。

筆者 — 分かりました。それらも重要な文献ですから、折があれば取り上げることにしましょう。

では、「百匹目のサル」ですが、これは、実は日本が舞台でして、宮崎県最南端に都井岬があるのはご存知ですね。その近くに「幸島（こうじま）」という無人島があって、ここは古くから野生のサルが棲んでいたため、猿島とも呼ばれていました。そこで、京都大学の霊長類研究グループが、その生態の研究を始めたのです。そして、一九五二年のこと、餌として生のサツマイモを与えた所、砂まみれになって、食べることができませんでした。その時、一匹の若い牝サルが突然それを川へ持って行って、洗って食べたのです。すると、この食べ方がサルの仲間になんて広がって、一九五八年までには若いサルの全部がこの方法を身につけたのですが、五歳以上の成熟したサルでは一部の者だけだったそうです。ところが、このようにして九九匹のサルがその洗う仲間に入って、更にもう一匹の「百匹目」が加わった時、その日の夕方には「群」（コロニー）のほぼ全員が洗い始めたのでした。勿論、九九匹とか百匹というのは説明のための形式上の数字であって、臨界点を示すものです。そして、事はこれで終らず、この洗う習性は、離島という自然の障壁を飛び越えて、他の島の「群」や大分県の高崎山の「群」でも自然発生しました。ワトソン氏は、このような目に見えないネットワークの存在を紹介し、世界中の人々を驚かせたのですが、この作品には他にも面白い話が色々ありますから、ぜひご覧になって下さい。

D氏 — 名前だけは聞いていたのですが、大変面白いお話で、何故かうれしくなっていました。そうすると、人間にも、そのような目に見えないネットワークがあると考えていいのですか。

筆者 — ええ。人間も「集合意識」（ユングの集合的無意識）のレベルでは、一つにつながっていると言われます。ただ、人間は動物のように本能に従って自動的に進化が起こるのではなく、意識的に理解しなければなりません。だからこそ、イエスは弟子たちに、「福音」（良き便り — 地球の次元上昇のこと）を世界中の人々に知らせること（伝道）を命じたのであって、「キリスト教」を作れと言ったわけではないのです。とは言え、人類はこの集合意識のレベルでは、もはや核戦争を望まなくなったために、古来様々な予言で語られた「人類滅亡」は、かろうじて避けられたようですね。

これはどなたにもご理解ねがえると思いますが、すべての人が本気で「平和」を望んだならば、瞬く間に「地上楽園」が実現するでしょう。要するに、すべては「想い」から始まるのであって、その「想い」が変わらないかぎり、結果である「現象」をいくら変えても、それは何度でも繰り返すのです。先ほどの「セスは語る」によると、「真実はこうです。あなたがた一人ひとりが各自の物質的現実を創り上げます。そして、地上で体験する繁栄も恐れも、あ

なた方自身が『手に手を取りあって』創造するのです。みずからが創造者であることに気づくまで、あなたは創造する責任を回避し続けるでしょう。」

D氏 — 今の「人類の滅亡」は避けられたというお話ですが、そのような訳（人類が無意識レベルで選択したこと）があったのですか。私たちは一九九九年に人類は滅ぶと思っていましたから、なぜノストラダムスの予言が当たらなかったのか、みんな不思議に思っていたのですよ。勿論、安心はしましたが。

筆者 — 私は一九九五年の「星の王子様は語る」（大学公報）以来、「人類滅亡」は回避されたと言ってきましたが、ノストラダムス自身も、一九九九年に人類が滅ぶとは言っていない。それは結局のところ、世紀末の不安に便乗したコマーシャルイズムの、キャッチ・コピーではなかったのでしょうか。日本には、いわゆる霊能者も含めて「ノストラダムス信者」とも言うべき人たちが大勢いますが、予言は必ずしも当たるわけではないどころか、多くの予言がはずれることはよく知られています。そのような中で、ノストラダムスの予言は特別によく当たったために、必ず実現すると信じられたようですが、予言とは、その時点での可能性ないし見込みですから、正確なことは「神」でも分かりません。たとえ大筋では何時か実現することがあるとしても細部は不確実であるのは、人間の自由意志が関与するかぎり当然のことでしょう。それ故、予言はあくまでも「警告」なのであって、すべてが最初から決定されているのであれば、予言などには何の意味もないのではないのでしょうか。

A氏 — そもそも、何で「予言」が可能なのですか。あしたの天気も分からないのに。

筆者 — 疑問はごもっともで、この三次元の物質世界では、時間が過去から未来へ一直線に流れているように見えますから、その時は予言は不可能になりますが、上位の次元では、いわゆる時間は存在しないと言われています。そこは過去と現在と未来が同時に存在して、ただ変化があるのみの永遠の世界だそうですから、私たちには理解しにくいのも無理はありません。そこで想像していただきたいのですが、平面に存在するものが直線の等速運動をする時は、高い所から見れば、何時にどこへ着くかが分かります。かくして軍事衛星が登場したわけですが、今度は更に、この直線の時間を越えて、その両端を同時に見れば、過去と未来が今、同時に存在するのではないのでしょうか。それは、地をばう「虫」が、自分が空を飛んだ時を考えている図です。この「虫」（人間）はそれを肉眼で見ることはできませんが、その本体は「多次元的存在」であるが故に、それを見ることができる「上位自己」（ハイヤー・セルフ）などの伝達を「受信」（チャネリング）できるわけですね。かくして、「予言」は人類の歴史と共にありました。

では再び元に戻りますが、ニュー・サイエンスはその後、「ホログラフィー理論」を提唱した量子物理学者のデビット・ボーム氏と神経生理学者のカール・プリブラム氏や、その他大勢の科学者が参加して、この潮流は、さらに大きな流れを形成して行きます。

これまでの歴史を振り返ってみれば、人間は近世以降の科学の発達の中で、物質主義という袋小路に入ってしまった。しかし、人間の命というエネルギーの川は、物質主義のダムに塞き止められても、やがて満水となり、堤を越えて行きます。このように、常に進化して行くのが宇宙の法則であって、伝統は反対に停滞や不動となり、それは死につながる。そして、それを打破するのが、「百匹目のサル」で見たように、常に若い命のエネルギーであることが分かるでしょう。意識を拡大すれば、それは永遠の今という変化であって、不動の永遠こそが死であり、宇宙に死はないのです。「永遠の相」が、かいま見えたのでしょうか。この「宇宙世界」は、唯物論で分かるほど単純ではなく、遙かに遙かに奥行きが深いことをご理解いただきたいと思います。

D氏 — 今のお話の「ホログラフィー理論」も、初めて聞きましたが……。

筆者 — 「ホログラフィー」はレーザーを用いた新しい写真法で、私も実物は見たことがありませんが、かなり複雑な仕組みですから、詳細は百科事典などを見て下さい。簡単に言いますと、先ずレーザーの二つの光波で対象を撮影すると、干渉縞のフィルムができますが、このフィルムに再びレーザー光線を当てると、三次元の立体映像が作られるのです。この立体映像を「ホログラム」と言うのですが、「ホログラフィー理論」とは、実はこの宇宙そのものも一種のホログラムであるという、まことに驚くべき理論なのです。そして、長年超常現象を体験し、その解明を目指してきたマイケル・タルボット氏が、この理論を様々な角度から論究しました。それが著名な「ホログラフィック・ユニバース — 時空を超える意識」(川瀬訳)であり、彼はその中でこの理論を紹介して、こう言っています。「(彼ら科学者は) 私たちの世界も、その中にあるものも — 舞い落ちるひとひらの雪から、楓の木、流れ星、回転する電子に至るまで、ありとあらゆるものは幽霊のごとき映像にすぎず、私たちが認識する現実とはあまりにかけ離れた、文字どおり時間と空間をまったく超越したレベルからの投影であることを示唆する証拠がある、というのだ。」

D氏 — これもまた、すごい話ですね。

筆者 — しかも、この現代の最先端の理論を最初に紹介した人が、実はあのソクラテス(紀元前の399年にアテネで獄死)なのでした。それが紀元前(375年頃)に書かれたプラトンの代表作「国家」の中の、有名な「洞窟の神話」です。これも名前だけ知られて、実際に読む人は少ないと思われますの

で、どのようなものなのか実際に見てみましょう。

《Représente-toi donc des hommes qui vivent dans une sorte de demeure souterraine en forme de caverne, possédant, tout le long de la caverne, une entrée qui s'ouvre largement du côté du jour》(pléiade)：「では想像してくれたまえ、洞窟を利用した一種の地下住居に暮す人々のことを。その洞窟には、明るい方に大きく開いた入口がある」(第7巻、514A)。プラトンの兄で、当時まだ青年だったと思われる「グラウコン」を相手に、ソクラテスは、このように語りかけました。

《à l'intérieur de cette demeure ils sont, depuis leur enfance, enchaînés par les jambes et par le cou, en sorte qu'ils restent à la même place, ne voient que ce qui est en avant d'eux, incapables d'autre part, en raison de la chaîne qui tient leur tête, de tourner celle-ci circulairement》：「この住居の中で、子供の時から足と首を鎖でつながれているために、彼らはいつも同じ場所において、しかも頭部をつなぐ鎖のために頭をぐるりと回すこともできないので、自分の前にあるものしか見えないのである」(514Aから514B)。これはかなり奇妙な人たちに見えますが、ここは、「ガレー船」という軍艦を漕ぐ囚人ないし奴隷を念頭に置いたものでしょう。

《Quant à la lumière, elle leur vient d'un feu qui brûle en arrière d'eux, vers le haut et loin. Or, entre ce feu et les prisonniers, imagine la montée d'une route, en travers de laquelle il faut te représenter qu'on a élevé un petit mur qui la barre, pareil à la cloison que les monteurs de marionnettes placent devant les hommes qui manœuvrent celles-ci et au-dessus de laquelle ils présentent ces marionnettes aux regards du public》：「明かりはと言えば、彼らの後方の、高くて遠い所で燃えている燈火から来ている。今度は、この燈火と囚人たちの間に登り道を思い描いて、その道を横切って低い石堀が立てられていて、道を塞いでいると想像しなければならない。その堀は、人形使いが人形を操作する人たちの前に置いて、その上で観客に人形を見せる、あの仕切りに似ている」(514B)。この「燈火」が「太陽」であることは明らかでしょう。しかも、この世の太陽ではなく、「イデア界の太陽」(「イデア界」の中心である「善のイデア」)を表わしています。

《Alors, le long de ce petit mur, vois des hommes qui portent, dépassant le mur, toutes sortes d'objets fabriqués, des statues, ou encore des animaux en pierre, en bois, façonnés en toute sorte de matière》：「では、この低い堀に沿って、人々がそこを通りながら、石や木やあらゆる材料で作られた彫像や更には動物など、あらゆる種類の模造品を運んでいるのを見るように」(514

Bから515A)。この「人々」が、先ほどの譬えの「人形を操作する人たち」に当たりますが、それは勿論、「神々」に外なりません。

《Tu fais là, dit-il, une étrange description et tes prisonniers sont étranges !》：「あなたは不思議な描写をしますね。あなたの言う囚人は奇妙な人たちです、と彼は言った」(515A)。言うまでもなく、「あなた」がソクラテスであり、「彼」は聞き手のグラウコンです。

《C' est à nous qu'ils sont pareils ! repartis-je. Peux-tu croire en effet que des hommes dans leur situation, d'abord, aient eu d'eux-mêmes et les uns des autres aucune vision, hormis celle des ombres que le feu fait se projeter sur la paroi de la caverne qui leur fait face ?》：「私たちは正に彼らと同じなのである、と私は言い返した。君は実際、次のようなことが信じられるだろうか。彼らのような状況の人間が先ず第一に、自分自身やお互いについて、彼らが向き合っている洞窟の内壁に燈火によって投影される影の像以外に、何らかの像を見たことがあるなどと」(515A)。次いで、その他の「塀に沿って運ばれる品物」についても、事情は同じであることが確認されます。では、ここでもう一度、タルボット氏の文を見てみましょう。「(彼ら科学者は) 私たちの世界も、その中にあるものも — 舞い落ちるひとひらの雪から、楓の木、流れ星、回転する電子に至るまで、ありとあらゆるものは幽霊のごとき映像にすぎず、私たちが認識する現実とはあまりにかけ離れた、文字通り時間と空間をまったく超越したレベルからの投影であることを示唆する証拠がある、というのだ。」いかがですか。先ほど、すべては既に言われていると申し上げましたが、以上もその一例ということです。

D氏 — いや、本当に驚きましたね。「ホログラフィック理論」が真実であるならば、先ほどの「セス」の話も、にわかに現実性を帯びてきますよ。

筆者 — ええ。その点はまた触れることにしまして、タルボット氏は更に、こう続けています。「ホログラフィック・モデルに関して最も仰天すべきことは、あまりにつかみどころがないという理由から、これまでは科学の領域外にあると分類されてきた広範な種類の現象に、突如としてはっきりと説明がつくようになった、という点にある。例をあげれば、テレパシー、予知現象、宇宙との神秘的な一体感、そして念力（サイコキネシス — 手を触れずに物理的に物を動かすという心の力 — 訳注）でさえも説明ができるようになったのである。」これは大変重要なことではないでしょうか。勿論、自分で体験して知っている人にとっては、それは当り前のことであり、自分に対しては何の説明の必要もありません。しかし、世間には、極端なアンチ・オカルト主義で有名な「ビッグ・ムーン教授」（日本人）を始めとして、超常現象をすべて否定する人

は大勢いますからね。

D氏 — それにしても、あの方は何故、あんなに張り切るのでしょうか。

筆者 — （笑いながら）恐らく、サービス精神の旺盛な方で、人々を喜ばせるためにピエロ役を演じて、自らも楽しんでおられるのではないのでしょうか。

それはともかくとして、タルボット氏は以上のような理由から、先きほどご紹介したスタニスラフ・グロフ博士にも言及しているのです。「一九八五年に出版された著書の中で、メリーランド精神医学研究センターの精神医学研究部長であり、ジョンズ・ホプキンス大学医学部の精神医学部助教授のスタニスラフ・グロフ博士は、脳に関する現在の神経生理学モデルはどれも不十分であり、元型（アーキタイプ）体験、集合無意識との遭遇や、変性意識状態で経験する他の異常現象を説明できるのは、ホログラフィック・モデルしかないという結論を下している。」要するに、長い間、科学の名の下に否定され、無視され続けてきた諸々の事が、ようやく日の目を見るようになってきたということです。

それは結局、現実をいかに認識するか、世界をどう見るのかという問題に帰着するのですが、先ほどの「セス」という高次元の存在は、はっきりと、こう断言しています。「あなたがたの太陽系は、時間的にも空間的にも、いっせいに同時に存在しています。あなたがたが知覚あるいは機器を通して知覚認識している宇宙は、さまざまな距離にある銀河や恒星や惑星から構成されているかのように見えます。しかし、それは根本的に錯覚の賜物なのです。物質的被造物としてのあなたの感覚機能と、実際のあなたの在り方が、あなたをして宇宙をそう知覚するようにプログラミングしているのです。あなたが知る宇宙とは、あなたの三次元的現実には物事が立ち入ってきたときに、あなたがそれをどう解釈したかという象徴です。物事は、観念的ことがらなのです。」私は前論において、「普通は二次元の映像を『ヴァーチャル・リアリティー』（仮想現実）と呼んでいますが、実はこの三次元の現実世界もまた、同じ『ヴァーチャル・リアリティー』なのです」と申し上げましたが、その意味がご理解いただけたのでしょうか。「セス」は正に、いわゆる「現実」はヴァーチャル・リアリティーだと言っているのです。

そのような「セス」に対して、タルボット氏は、次のような賛辞を呈しました。「私が超常現象と量子物理学の分野において広汎にわたる研鑽と切磋琢磨のすえ、ようやく到達するに至った現実についての見解を、何とも驚くべきことに、そして正直ちょっぴり悔しいことに、セスがこうして雄弁かつ明快に語っているではないか」（「推薦の言葉」より）。彼の悔しさも分かりますが、相手は何しろ人間を越えた高位の存在なのですから、これは致し方ありませ

ん。蛇足ながら、普通の世界観をお持ちの方は、ぜひ「ホログラフィック・ユニバース」をご覧になって下さい。子供になって素直に読めば、人生観が一変するのではないのでしょうか。

3 神に責任はあるか

筆者 — そして、同じ八〇年代の半ば頃から、シャーリー・マクレーンの精神世界に目ざめるまでの手記、「アウト・オン・ア・リム」が大ベストセラーとなりました。ちなみに、この作品には、「精神世界」という言葉が何度も出てきます。

A氏 — シャーリー・マクレーンで、まさか、あの女優の…

筆者 — ええ、そのまさか、なのです。それは、自分自身の恋愛（不倫）も語られますが、それと同時進行の精神のドラマが主題であって、有名女優の「スキャンダル告白本」などではありません。その後作られた同じ内容のテレビ・ドラマも、自身が主演して大ヒットとなったそうですが。

A氏 — 昔、彼女の映画を見ましたが、知的な女性というイメージが強かったですけどねえ。

筆者 — その点は自分でも認めていて、最初はかなり抵抗感があったようですが、人一倍旺盛な探求心と自由な精神で、その壁を見事に乗り越えて行くのです。彼女のように男性遍歴を重ねた末に、地上から飛び立つ女性は意外に多いようでして、そのたくましさには感嘆の外はありません。特にS. マクレーンの場合は、ついに「幽体離脱」にまで至ったのですから、文字通り地を離れて空へ昇ったのです。本当のことを言えば、私自身は昔の人間ですから、「異性に興味を持つこと自体が悪」という時代の空気の中で厳格に育てられましたので、当然ながら、多情な女性には偏見を持っていました。それに、男は古来、苦行や禁欲によって悟りを目ざして来ましたので、そのようなものと思っていたのですが、実に様々な道があるものですね。Dさんは、この作品はご覧になりませんでしたか。

D氏 — ええ。私が「精神世界」を読み始めたのは、もう少し後ですから。題名の「アウト・オン・ア・リム」とは、どんな意味ですか。

筆者 — 辞書を見ると、「危ない状態で」とか「困難な立場で」という普通の慣用句なのですが、訳者の山川氏の解説によると、「果実すなわち『真理』を得るためには枝の先まで危険を冒して登らなければならない」という意味だそうです。この作品はアメリカで300万部以上のベストセラーとなり、「精神世界」ではエポック・メイキングな記念碑と言われていますが、精神的な目ざめ

の過程を克明に記しているために、今でも広くすべての人に勧めることができるのではないのでしょうか。

A氏 — もう少し具体的に、どんな内容か分かるといいのですけど。

筆者 — 実は、この作品には続編（「ダンシング・イン・ザ・ライト」）があって、その中で前作の内容を、このように要約しています。「イギリスの政治家との恋愛や、彼の狭いものの見方や、自分に理解できないものを拒絶する心に対する私の攻撃、精神世界を探索することによって得た悟りへの手がかり、輪廻転生に対する興味、霊媒を通じて向う側の世界に住む精霊と語り合った体験、ピーター・セラーズに聞いた彼の死の体験（臨死体験）と愛に満ちた美しい白光の話、アンデスへの旅とそこですばる座から来た女性と会ったと話してくれた友人のこと、私自身が次第に（以下の「確信を持つに至った」につながる）我々すべての人が何回もこの世に生まれてくるのだという確信を持つに至ったこと、そして体外遊離体験すなわち魂が体から抜け出した経験、つまりそれまで疑問視していたことを自分自身で経験することによって、学んできたことがすべて本当だとわかった体験等々。」

残念ながらというか案の定というべきか、世間（アメリカ）では、この「イギリスの政治家」は誰かに関心が集まったようですが、先ほど言いましたように、これは有名女優の「スキャンダル告白本」ではなくて、ここで何気なく触れている「すばる座（プレアデス）から来た女性と会ったと話してくれた友人」（男性）こそが、不思議な縁で彼女を導いて目ざめさせてくれたキー・パーソンなのです。彼女は精霊によって、それが自分の「双子霊」（ツイン・ソウル）だと教えられるが、この二人の不思議なかかわり合いが経糸となった、「霊的ストーリー」であることを見まちがえないで下さい。

そこで、彼女は自分が学んだことの要点を、日本語版の序文（「日本の読者の皆様へ」）の中で、このように述べています。「私たちの生きているこの世界はとても面白い時代にさしかかっています。特に天なる神と内なる神の光と愛に共鳴できる状態にいれば、なおのことです」とか、「私たちの人生に起きてくる悲劇的な事件でさえ、確かな理由があって起こっているのです。その確かな理由というのは、私たち一人ひとりの成長のために必要だからこそ起こっているということなのです。もし自分の人生は自分の内なる神を経験するためのものだとは常に忘れないでいるならば、私たちの人生は輝きに満ち、一見悲劇に思えることも、実は悲劇ではないのだとわかるのです」、「今までに私が学んだ最も重要なことは、この世に現実などほんとうは存在しないということです。私たちが現実として見ているものはすべて、私たちがそれをどうとるかという認識の問題だとわかったのです」、「自分こそが自分の人生の実現者なの

です。また自分こそが自分の先生なのです。あなた自身が神であることに気づいて下さい」、「神の国はあなた自身の内にあります。先生は他の誰でもない、あなた自身です。他人を先生とあおぐのはやめましょう」など。

彼女は元々、文才のある人でしたが、見えない世界の多大な導きの下で目ざめさせられて、それを書く使命を与えられた人でした。それ故、この序文で述べられたことは、この地球学校の上級クラスの教えなのですが、多少の表現の違いはあっても、私がこれまで何度も申し上げてきたことと重なることに、お気づきになったでしょうか。

A氏 — そんなことを言われてもですねえ。「悲劇的な事件も理由があって起こっている」だなんて、どうしてそんなことが言えるのですか。私が一番分からないのは、もし本当に「神」が存在するならば、世界がなぜこれほど滅茶苦茶なのかということです。

筆者 — 確かに昔から、世が乱れた時は、「神も仏もあるものか」と言われてきましたからね。外国でも、様々な「悪事」や「不幸な出来事」や「病気」などを見て、多くの人が理解に苦しみ、「神」の存在を否定するに至るようです。特に今は、末世の中の末世であり、聖書もこのように予告していました。

《sache ceci : que dans les derniers jours des temps décisifs et durs seront là. Car les hommes seront amis d'eux-mêmes, amis de l'argent, présomptueux, hautains, blasphémateurs, désobéissants aux parents, ingrats, sans fidélité, sans affection naturelle, intraitables, calomniateurs, sans maîtrise de soi, cruels, sans amour du bien, traîtres, entêtés, gonflés [d'orgueil], amis des plaisirs plutôt qu' amis de Dieu》：「終わりの日々には、断固たる厳しき時代の来ることを知れ。何となれば、人間は、かくの如き者になればなり。即ち、己れ自身を愛する者や、金銭を愛する者、自惚（うぬぼ）れたる者、高慢なる者、不敬の者、親に不服従の者、恩知らずの者、不誠実なる者、自然の情愛なき者、頑固者、中傷する者、自己抑制なき者、残酷なる者、善を愛さぬ者、裏切る者、強情なる者、自尊心に満ちたる者、『神』よりも快樂を愛する者ぞ」（「テモテへの第二書簡」、3章1節から4節）。これは西暦六五年頃、ローマで投獄されたパウロが、死ぬ少し前に若き弟子テモテに宛てた手紙です。この「断固たる厳しき時代」とは、クリスチャンなど善良な人々にとって、「どう対応してよいか分からない時」ということでしょう。以前に聖書の勉強を始めた頃のことですが、私はこの引用個所を読んだ時に、この「本」（バイブル）と呼ばれる本が、ただの本ではないことに気づきました。しかしながら、今や以上のようなことは当たり前になって、誰もあまり気にも留めませんが、考えてみれば、これまた恐ろしいことだと言わざるを得ま

せん。

実際のところ、もし本当に「神」が存在するならば、何故そのような悪しき者が存在するのを許したり、様々な不幸が起きたりするのか。それは多くの人々にとって、この世の最大の謎かも知れませんが、これは、「この世」、つまり結果である現象界だけを見ても解決がつく問題ではありません。つまり、原因である「過去世」と「あの世」の存在を知る必要があるということです。そこで近年、世界的に脚光を浴びているのが、いわゆる「臨死体験」と言われているものです。要するに、事故や病気で文字通り「死に臨んだ」人が、「あの世」を垣間見た体験ですが、一般に広く知られるようになったのは、一九七五年にレイモンド・ムーディ博士が「かいまみた死後の世界」を発表してからで、この本は全世界に大きな衝撃を与えました。私も日本語版が出た時に、大変興味深く読んだ記憶があります。

そして、この「臨死体験」を最初に取り上げた人が、やはりあのソクラテスなのでした。それが、同じ「国家」の最後で語られた、あの「エルの物語」という有名な「ミュートス」（神話）です。では、こちらも少しご紹介しておきましょう。

それは先ず、このように始まります。《il trouva un jour la mort dans un combat, et, comme dix jours plus tard on relevait les morts déjà en décomposition, on le releva, lui, bien conservé ; transporté chez lui pour les funérailles, le douzième jour, placé sur le bûcher, il ressuscita, et, après sa résurrection, il raconta ce que là-bas il avait vu》：「ある日、彼は戦闘で死んだ。そして十日後に、人々は既に腐敗した戦死者たちを引き起したが、彼だけは少しも腐敗していなかった。葬式のために自分の家へ運ばれて、十二日目に（火葬の）薪の上に乗せられた時、彼は蘇った。そして蘇生の後、自分が彼方で見たことを語った」（第十巻、614B）。この「彼」が、「アルメニオスの息子の、勇士エル」です。彼の体が腐敗していなかったことにご注目下さい。腐敗した体が蘇生することは、絶対にありませんから。

《Aussitôt sortie de lui, son âme, disait-il, s'était mise en route avec quantité d'autres, et elles étaient parvenues en un lieu extraordinaire où la terre avait deux ouvertures contiguës entre elles, et le ciel, de son côté, deux autres, qui en haut leur faisaient face. Dans l'espace compris entre ces quatre ouvertures siégeaient des juges qui, leur jugement rendu, commandaient aux justes de prendre la route de droite, celle qui monte et traverse le ciel, leur ayant, par-devant, attaché l'indication des actes qui avaient fait l'objet de jugement; aux injustes de prendre la route de gauche,

celle qui descend, portant, ceux-là aussi, mais par-derrière, l'indication de tout ce qu'ils ont fait》：「彼は次のように言った。自分の（体の）外に出るとすぐ、彼の魂は他の大勢の魂と一緒に出発して、彼らはある不思議な場所に到着した。そこは地面に二つの穴があって、お互いに隣接しており、天の側にも二つの穴があって、上方で下の穴と向き合っていた。この四つの穴の間の空間に裁判官たちが席についており、彼らは判決を下すと、正しい者たちには、判決の対象となった行為の目印を前につけて、右手の、天を通り抜ける登り道を進むように命じた。また不法な者たちにも、彼らの行なったすべての行為の目印をつけたが、ただし後ろにつけて、左手の、下りの道へ向かうように命じた」（614Bから614D）。

このような文章表現をみると、すぐ荒唐無稽だ、現実には有りえないと言って投げ出す人がいますが、この類のものはすべて象徴的なものであると考えて下さい。例えば、このような「裁判官」の本当の姿は、各自の「保護者」ないし「コンサルタント」役の、守護神などでしょう。つまり、各自の守護神が、本人の理解度に応じて、すべてを象徴的に表現しているのです。実は、このような「霊界報告」は色々とあって、それぞれが国によって異なり、また個人によって異なるために、疑いの目で見られることが多いのですが、「霊界」は想いの世界であるために、各自が自分の理解できるものを見るからに外なりません。いわゆる「現実」も、物質世界の様々な条件の下での現実にすぎず、霊界では物質界の見方は当てはまらないのです。

さて、エルも他の者と同じように、ここで裁判を受けようとしませんが、《ils lui dirent qu'il était destiné à être pour les hommes un messenger des choses de là-bas, et ils lui recommandèrent d'écouter et de bien regarder tout ce dont ce lieu serait le théâtre》：「彼は彼方のことを人々に伝える役に定められていると言われ、この場所で演じられるすべてのことを、よく聞き、よく見るように命じられた」（614D）。そこで彼は、一方で、判決を受けた魂たちが天と地の片方の穴に向って立ち去るのを見ましたが、他方で、もう一つの、地の穴からは汚れた魂たちが出てきて、天の穴からは清らかな魂たちが降りてきて、お互いに情報交換をするのを見ました。この時に、地下から来た者たちの口からは、様々な恐ろしい話が語られたのです。

次いで、《Lorsque, pour les âmes de chaque série, sept jours s'étaient écoulés dans la prairie, il leur fallait s'en aller de là, et, le huitième jour, se mettre en route. Quatre jours après, elles arrivaient en un endroit où elles apercevaient, tendue d'un haut à travers le tout du ciel et de la terre, une lumière verticale, en manière de colonne, ayant surtout rapport à l'arc-en-

ciel, mais plus éclatante et plus pure. Ils arrivèrent à cette lumière après avoir continué leur route pendant un jour, et là précisément, du milieu de la lumière, ils virent tendues à partir du ciel les extrémités de liens constitutifs de celle-ci; car cette lumière est ce qui assemble et lie le ciel, unissant ensemble sa révolution tout entière, à la façon du bandage des trières》：「それぞれの群の魂たちは、その野原で七日が経った時に、そこから立ち去らねばならなかった。つまり、八日目には出発しなければならなかったのである。四日後に、魂たちはある場所に近づいていたが、そこには上から天と地の全体を貫いて射し込む、柱のような、垂直の光が見えた。それは、とりわけ虹に似ていたが、更に輝かしく清らかな光であった。彼らは一日中進路をたどった後でこの光の場所に到着したが、正にそこで、彼らは光の真中から、（以下の「見た」へつながる）この光を構成する（何本もの）帯の先端が天から射し込んでいるのを見た。この光は、ガレー船の帯（タガ）のように、天の公転全体を結合することによって、天を組み立て、結びつけているのである」（616Bから616C）。お分かりになりますか。

A氏 — 全然、お分かりになりません。この死後の「魂たち」は、さきほど「裁判」を受けて、天上か地下へ行ったのではないですか。それとも、ここは、その後のことを言っているのかしら。それならば、何で彼らは一緒にいるのかしらね。

D氏 — それに、そこで見た「光」の描写も、何を表わしているのか分かりません。

筆者 — 実は、ここの「魂たち」が誰を指すかは大変難しく、仏訳にも邦訳にも何の説明もありませんので、私が独断と偏見に満ちた解説をすることにしましょう。まず、最初の「それぞれの群」ですが、一つは「地上」から旅立ったグループで、二つ目は「天」から降りてきたグループ、三つ目が「地下」から上がってきたグループということです。そして地上からきたグループは、既に見たように「裁判」を受けて、「正しい者」は天に向い、「不法な者」は地下に去ったわけですね。しかし、本文では言及されていませんが、実は彼らも七日目までそこにいたのでして、これが日本で言う「初七日」に当るのではないのでしょうか。その後で、ある者は「天」に向かい、またある者は「地下」へ降りて行ったのです。

次に、エルが他の再生のグループと一緒に向かった所は宇宙の中心でしたが、彼らがそれを見せられたのは、宇宙そのものの仕組みを知るためなのです。当時の宇宙観は天動説でしたから、中心に地球があって、巨大な天球に満天の星が張りついていました。これらの星をしかるべき所に固定して、宇宙を

成り立たせているのが「光の帯」ですが、恐らく「天の川」をイメージしたものでしょう。念のために申しますと、「天動説」と言うと、よく馬鹿にする人がいますが、「地動説」を本当に知っている人は、自分で計算ができる天文学者だけなのです。それ故、今日でも日は東から昇り、西に沈むわけですね。ですから、目に見えない「関係」よりも「感覚」を重視する人たちは、本当は「天動説派」だと言わねばなりません。

D氏 — 大分ははっきりしてきましたが、「ガレー船」のことがよく分かりませんが。

筆者 — この「ガレー船」（「ガリー船」は英語読み）は、古代から近世まで地中海を中心に使われた軍艦で、普段は帆を立てて航行しますが、戦闘の時は、大勢の囚人たちにオールで漕がせて、一気に突撃します。その時、船首に「衝角」と呼ばれる、青銅で包んだ突起があって、これで敵船に体当たりをするのです。そこで、ガレー船は船体がバラバラになるのを防ぐために、丸い胴体（黒）に青銅のタガ（白）をはめたようですが、それが「天の川」ということです。ユー・シー（?）。

D氏 — アイ・シー。

筆者 — では、その続きです。《Ils virent, d'autre part, tendu à partir des extrémités, le fuseau de la Nécessité, par le moyen duquel la rotation est imprimée à toutes les révolutions》：「彼らは他方で、その（光の帯の）先端に仕掛けた「必然の女神」の紡錘（つむ）を見た。この紡錘によって、その回転がすべての（星の）公転へ伝達されているのである」（616C）。すべての原因をたどって行くと、一番先に「必然の女神（アナнке）」がいて、「天体の運行」という宇宙の必然を紡いでいるのを見たのでした。

D氏 — 神は、なぜ糸を紡ぐのですか。

筆者 — この必然の経糸に、人間の運命の横糸が織り成されて、「世界」というタペストリー（壁掛）ができるからです。それ故、その錘（おもり）は複雑な構造で、内側に更に七つの同型の錘が大きい順に入り、全部で八つの錘で一つの錘になっていますが、それぞれの大きさと幅は、太陽系の星が地球をめぐる回転運動と、それぞれの軌道の距離を示していると考えられています。図で示さないと分かりにくいかも知れませんが、心棒の長いコマの形で、その上面が八つの同心円になっていると考えて下さい。

そして、《La rotation du fuseau se faisait 《sur les genoux》 de la Nécessité, les cercles étant surmontés, chacun, d'une Sirène qui en accompagnait la révolution et qui émettait un unique son, c'est-à-dire une note unique, l'ensemble de ces huit sons donnant un accord consonant》：「紡錘の回転は

『必然の女神』の膝の上でなされていた。（鍾の）それぞれの輪の上に一人のセイレンが乗って、その輪の公転運動のお供をして、独自の音声、すなわち唯一とつの調べを発して、その八つの音声の全体は一つの協和音を生み出していた」（617B）。どうです、まことに見事な象徴だと思いませんか。科学者は認めたくないでしょうが、天体の運行に関しては、今の科学ではうまく説明できないのが実情です。少し真面目に考えてみれば、いわゆる重力と遠心力だけでは説明できないのは明らかでしょう。もし地球と太陽の関係を重力と遠心力のバランスで説明するとすれば、その他の天体との関係はどうなるのでしょうか。つまり、無数の天体は、なぜ一箇所に集まってしまいか飛び散ってしまわないで、このように整然と動いているのかということです。

人工衛星の場合を考えてみますと、地上300kmの所で水平方向へ毎秒7.7 kmの速度で発射すると、その後は軌道に乗って回り続けることができると言います。すると、誰が地球やその他の惑星という衛星を打ち上げて軌道に乗せたのでしょうか。また、この「軌道」とは何でしょうか。一方、太陽系のどの惑星の運動が狂っても、全体の整然とした運行は損われる筈ですが、そのようなことは起こらないのです。どなたもご存知のように、自然界には永久運動は存在しません。エントロピーの法則に従って、形あるものはやがて崩れ、運動もいずれは止まるのです。事実、人工衛星は間もなく高度が落ちて、燃えつきることはよく知られていますね。ところが、天体の無数の星は、昔から寸秒の狂いもなく運行してきました。しかも、実際は誕生と消滅を繰り返しているのです。また、宇宙全体を一個のボールとすると、このボールは何の上に乗っているのでしょうか。あるいは何が吊り下げているのでしょうか。要するに、これまでの考え方には、「フィールド」（場）が抜け落ちていたことがお分かりになるでしょう。この宇宙空間は、本当は真空などではなくて、広大なエネルギーの海だったのです。すべての物がそこから生まれ、また帰って行くエネルギーの母体ですね。また、当時の神秘主義教団のピタゴラス学派には、「天体音楽」という教えがあったそうですが、「コスモス」（秩序）には、やはりロゴス（創造の言葉）の様々な波動の調和という、「歌声」が必要なのではないのでしょうか。そして、以上の宇宙観を完全に超越したのが、先ほどのセスの「宇宙錯覚論」なのですが、ここでは触れません。

A氏 — 「セイレン」は、ギリシャ神話の「サイレン」のことですか。

筆者 — ええ。もとの神話では、その歌声で船乗りを魅了して食い殺すという、上半身が人間の女で下半身が鳥の怪物ですが、英語読みで「サイレン」になります。トロイ戦争の英雄オデュッセウス（英語でユリシーズ）が、部下には耳に栓をして船を漕がせながら、自分は帆柱に体を縛りつけさせてセイレン

の歌声を聞いた話は、久しく語り継がれてきましたので、どなたもよくご存知と思いますが。

続きです。《Il y avait encore, assises en rond, toutes trois à l'égale distance, chacune sur un trône, les filles de la Nécessité, les Parques, tout de blanc vêtues, la tête couronnée de bandelettes : Lachésis, Clothô, Atropos ; répondant à l'harmonie des Sirènes, elles chantaient, Lachésis le passé, Clothô le présent, Atropos l'avenir ; en outre, Clothô, de sa main droite posée dessus, aidait à la révolution circulaire du cercle extérieur du fuseau, en observant des intervalles de temps ; autant en faisait de son côté Antropos, avec sa main gauche, pour les cercles intérieurs ; quant à Lachésis, elle contribuait, de l'une et l'autre main, alternativement imposées, à l'une et l'autre révolution》：「更に、『必然の女神』の娘である『運命の三女神パルカ（イ）』、即ちラケシスとクロトーとアトロポスが、そろって白装束で頭にヘア・バンドを着け、三人とも（「必然の女神」を中心に）同じ距離に円陣を組んで、それぞれ王座に坐っていた。彼女らはセイレンのハーモニーに合わせて、ラケシスは過去を、クロトーは現在を、アトロポスは未来を歌っていた。その上、クロトーは時間の間隔を見ながら、右手を上に乗せて、紡錘の（錘の）外輪の円環公転運動を助けていた。同じくアトロポスも、自分の側から左手で、（錘の）内部の輪に対して同じことをしていた。ラケシスの方は、一方の手と他方の手を交互に上に置いて、ある公転運動から別の公転運動へと力を貸していた」（617BからD）。宇宙の根本法則である「必然」から生まれた「運命の女神」は三人いて、ギリシャ神話では「モイラ」（モイライは複数形）と言い、ローマ神話では「パルカ」（パルカイは複数形）と言います。彼女らは、人間の命の糸を紡ぎ、操り、断ち切る恐ろしい神と考えられました。

では、ここからが一番肝心な所です。以上は、ここを取り上げるためだったのですから。《Or, une fois arrivés, c'était pour eux une obligation immédiate d'aller vers Lachécis. Mais un hiérophante commença par les séparer pour les mettre en rangs, puis sur les genoux de Lachésis, il prit des billets de lotterie, qui correspondaient à des types d'existence, et, montant sur une haute tribune, il parla en ces termes : Édité de la vierge Lachésis, fille de Nécessité : Âmes éphémères ! voici que commencé pour une race mortelle un autre cycle porteur de trépas. Ce n'est pas vous qui serez reçues en partage par un Démon, mais c'est vous qui choisirez un Démon : que celui que le sort aura désigné pour être le premier choisisse le premier l'exis-

tence à la compagnie de laquelle il y a nécessité qu'il soit uni ! La vertu ne connaît pas de maître ; en possédera plus ou moins quiconque l'honneur ou se refuse à l'honorer. La responsabilité du choix est pour celui qui l'a fait : la Divinité en est irresponsable ! 》：「さて、彼らはひとたび到着すると、直ちにラケシスの所へ行かねばならなかった。しかし、一人の密儀祭司が、彼らを分けて整列させ、次いでラケシスの膝の上から様々な型の人生に対応したクジを取り上げ、高い壇上に登ってから次のような言葉を述べた。『「必然の女神」の娘なる処女ラケシスの勅令なるぞ。東の間の命の者たちよ、死すべき種族（人間のこと）にとって、死（死すべき命）を運ぶ別の周期がこれから始まるなり。汝らは「ダイモン」（守護神）によって運命として受け入れられるにあらず、汝らこそが「ダイモン」を選ぶなり。クジで一番に当たりたる者は、最初に自分の同伴する人生を選ぶべし。その者は、その人生に必然的に結びつけられん。「勇気」（アレテー）は、（自分の）支配者を認めず。それを称えたる者は更なる勇気を持ち、称えるを拒む者は、さほど持たざるべし。選択の責任は、選択したる者にあり。「神」に責任はあらず』」（617DからE）。

A氏 — 前回の論で、ソクラテスは「ダイモン」の声を聞いたとありましたが、何か関係があるのですか。

筆者 — ええ。人間は誰でも「守護神」がついていて、その人の人生を陰で導いているのです。ところが、いつの間にか「守護神」を、自分の人生の支配者であるかのように考えるようになりました。ですから、ここでは、「ダイモン」の方が自分の運命として人間を受け入れるのではなく、人間が自分の人生を選んで、「ダイモン」はそれを陰で導くだけであると、その誤りを正したわけです。それから、ギリシャ語の「アレテー」（aretē）とラテン語の「ウィルツス」（virtus）は、よく「徳」と訳されますが、「徳」は「道徳」とも言うように、人の道にかなった倫理的品性のことです。一方、「アレテー」は、ある行為をする時に、その持てる能力を最大限に発揮させるものを指す言葉であり、「ウィルツス」も、男らしさや、勇敢さ、意志の強さなどを指すものと言われます。それ故、「アレテーは主人（支配者）を認めず」とは、それは誰の支配も受けない、自由なものだということでしょう。従って、生きていく上で、その協力が欲しければ、ただ称えよ、です。

では最後に、もう一度、「選択の責任は、選択したる者にあり。「神」に責任はあらず」にご注目下さい。古来よく知られた言葉だそうですが、これが先ほどの「神も仏もあるものか」の、答えそのものなのです。Aさんの疑問は解けたでしょうか。それとも、もう少し易しく話す必要がありますか。

A氏 — そうねえ……、何て言ったらいいのかしら。「選択」ということは、

もしかしたらその通りかも知れないけれど、何しろ「生まれ変わり」などは古くさい迷信だと教えられて育ちましたから、自分ではよく分かりません。ランボオは過去世の記憶があったそうですが、本当ですか。

4 過去世へのアプローチ

筆者 — それは難しい問題ですね。私自身は、虚と実の境目ぐらいだったのではないかと思います。彼が本当に自分の過去世を想起したのか、それとも単なるイマジネーションであったのかは、誰にも分からないでしょう。しかしながら、前世を具体的に思い出す人は、実際はかなりいるのですよ。外国では、この分野の研究も盛んに行なわれているのですが、その中でも前世研究の第一人者として知られているのが、イアン・スティーヴンソン博士です。彼は個々の事例にきわめて厳密な検討を加えて調査しているため、非常に高く評価されているのですが、そのようにして世界中から二千件以上のデータを集めて、「前世を記憶する子供たち」を著わしました。

D氏 — 例えば、どんなケースがあるのですか。

筆者 — そうですね。彼は十二の例にしぼって、要点のみを紹介しているのですが、その中の「ロバータ・モーガンの事例」を、さらに要約してご紹介しましょう。

「私（イアン・スティーヴンソン）が本例を初めて知ったのは一九七一年二月のことで、シャーリー・モーガン夫人という本人の母親が、ミネソタ州の自宅からヴァージニア大学の私のもとへ電話で知らせてくれたのである。それによると、娘のロバータは、数年前、『別のパパとママ』がいると主張し始め、そのふたりにしきりに（というか、気も狂わんばかりに）会いたがったという。ロバータの話では、（おそらくは、本人が記憶しているらしき前世時代に）“別のパパとママ”に帰ってくると約束したので、その約束を守りたい、というのであった」（笠原訳）。スティーヴンソン博士は、一九五七年からヴァージニア大学の医学部精神科主任教授だったのです。

「ロバータは、一九六一年八月二八日に生まれているので、一九七一年二月には九歳半になっていた。本人が前世の話を書いたのは、二才から二才半にかけてであった。モーガン夫人の説明では、ロバータが前世の話をしていた頃には、生まれ変わりに関する知識が全くなかったもので、でたらめを言っているとは思っていなかったという。その後、本を読みいろいろ考えた結果、ロバータは本当に前世を覚えていたのかもしれないと思うようになったばかりか、ロバータに前世の話をさせないようにしたのは自分の責任を果たしたことにな

らないのではないかと、とも思うようになった。」そこで、すっかり心配になった夫人は、少し前の一九六八年にヴァージニア大学医学部に超心理学研究室を設立して、超心理学会長を務めた博士に電話をかけて、相談してきたという次第なのです。

その後、彼が面接や書簡で得た情報によると、「前世の話を最も頻繁にしていた頃ロバータは、『時おり、〔前世の〕両親や自宅の記憶を全面的に残している子どもが養女にでも来ているみたいに』ふるまった。本人の話では、前世の家は、長い道を突き進んだところにあり、人里離れた一軒家だという。さらに、自分が覚えているという自宅の敷地についても話したが、馬や犬がたくさんいる農場で暮らしていた、という点を除けば、夫人は、ロバータが語った事柄をほとんど覚えていなかった。」そして更に、「ロバータは、自分たち一家が当時暮らしていた町に、『別のパパやママ』がいる、と言った。ある時ロバータは、母親と一緒に車に乗っていて、あそこに住んでいるんだ、と言いながらある道を指差した。本人が指差したのは、幹線道路から脇に入っていく泥道であった。本人は、その道に車を乗り入れて前世の家族に会いに行きたかった。ところが母親は、そうしたくなかった。この時にはロバータが本当のことを言っているとは思えなかったからである。その後ロバータは、せっかく前世の家族に会えるところだったのに連れて行ってくれなかった、と母親を何日も責めた。」要するに、彼女の話は、完全に無視されたのです。前世の記憶が確認されたケースは幾つかあるのですが、殆どの場合は、ロバータのような扱いを受けるのではないのでしょうか。

しかし、「明らかにロバータは、前世の両親の容姿を視覚的なイメージとしてはっきり記憶していた。ある時ロバータは、前世の母親に触れ、『あのママみたいにしてよ。だけど、あのママはママと似てなかったね』とモーガン夫人に言った。ロバータは、食事の支度をはじめ、家事全般については前世の母親のやり方を好んだ。」これについては、具体的な料理の話もあるのですが、その他の幾つかの話と共に省略します。

以上について、博士の様々なコメントがあります。ここでは一つだけ挙げておきましょう。

「モーガン夫妻は、ふたりともキリスト教徒であった。夫人はペンテコステ派に、夫はローマカトリック教会に所属していた。いずれの宗派の教えにも、生まれ変わりという考え方は出て来なかった。モーガン夫人は、ロバータが前世の話を始めた頃には生まれ変わりについて全く知らなかった。そのような話に耳を傾ける気はなかったし、ましてや、“別のママ”のところへ連れて行ってほしいというロバータの要求や、ロバータがいつもモーガン夫人を“別のマ

マ”と比較して悪く言っていた事実を受け入れる態勢にはなっていなかった。どの親であれ、このような評価をされれば、我慢するにしても限度というものがある。モーガン夫人も例外ではなく、毎日ロバータに叩かれ続けたため、半年もすると堪忍袋の緒が切れ、ロバータが前世のことを口にするたび、罰を与えるようになった。そのためにロバータは、次第に前世の話をしなくなり、ついには全く口にしなくなってしまったのである。」前回お話したように、キリスト教には教えきれぬほどの分派がありますが、どの宗派でも「輪廻転生」を否定しているようです。わずかな例外はあるかも知れませんが、六世紀半ばの「宗教会議」（五五三年の「第二コンスタンチノポリス公会議」）で異端として禁止されて以来、そのようになってしまいました。

A氏 — それは、一般によく知られたことなのですか。

筆者 — ええ、最近では様々な書物で述べられている明白な歴史的事実なのですが、組織としては、何の痛痒も感じていないのかも知れませんね。何であれ、都合の悪いことは無視すればよいということなのではないでしょうか。ともあれ、ロバータが前世を語り始めた二才の一九六三年当時は、まだ「輪廻転生説」はそれほど広まっておりませんでした。S. マクレーンの「アウト・オン・ア・リム」が出たのは、それから二十年後の一九八三年であり、続編の「ダンシング・イン・ザ・ライト」で、彼女がついに自分の過去世をはっきりと思い出す場面を印象的に語ったのは、その二年後の八五年です。

D氏 — ブライアン・ワイスさんの「前世療法」も、当時はまだ行なわれていなかったわけですね。

筆者 — 彼は、その頃はちょうど大学に入ったぐらいでしょうか。彼の第一作の「前世療法」は、原題が“Many Lives, Many Masters”（多くの人生、多くのマスター達）で、これも世界的に著名になりましたが、出たのは「ダンシング・イン・ザ・ライト」の後の、八八年です。Dさんがご覧になったのは、その後の「魂の伴侶」（日本語版は1996年）の方でしたか。

D氏 — ええ。「前世療法」の方も読もうと思っていたのですが。

筆者 — 「魂の伴侶」は日本のテレビでも紹介されましたので、ご存知の方も多いと思いますが、こちらは「前世療法」の続編に当たるわけですね。正確に言えば、「前世療法2」の後に出了たのですが。

A氏 — （D氏に）その、「前世療法」て何。

D氏 — これは催眠術を使って過去世を思い出させるのですが、それによって、普通の精神分析では直らない病気でも、不思議なことに直ってしまうみたいですよ。

A氏 — 催眠術だなんて聞くと、何となくいかかわしいイメージがあるけど

……。

筆者 — 催眠療法は、イギリスやアメリカでは早くから正式の医療法として認められているのですが、日本は遅れていて、まだ民間治療法の段階のようですね。欧米では、精神分析による治療法の一つとして、ごく普通に用いられているのですよ。ところが、ある時、思わぬことが起きたのです。通常のように、トラウマの原因を見つけるために、退行催眠で子供時代まで遡ったところ、突然ゼロ歳を飛び越えて、何と過去世まで行ってしまったのです。中でも有名なのが、一九五六年にアメリカで起きた「ブライディー・マーフィー事件」です。ルース・シモンズという女性が退行催眠を受けたところ、自分がブライディー・マーフィーという名前のアイルランドの娘であったことを思い出して、これを発表した「ブライディー・マーフィーをさがして」は、六百万部の大ベストセラーになって騒がれました。そのような事例が増えるにつれて、「前世療法」（退行催眠療法）が少しずつ確立されて行っただけです。

A氏 — その「前世療法」の事例は、先ほどの「前世を記憶する子供たち」と似たようなものなのですか。

筆者 — いや、もっと生々しく、劇的なものがありますね。いわゆる過去を思い出すのとは違って、突然、過去世のある時点に戻って、その場面を再体験するのです。時には、トラウマの原因となった、恐しい事故や死の瞬間までも、ですね。では、以下で具体的に見てみましょう。

ワイス博士の最初の事例となったキャサリンは、一九八〇年当時二十七歳の女性で、子供の時から神経症と強迫観念の悪化に悩んで彼の診療室を訪れたのです。以下は、ワイス博士が彼女から聞いたことです。

「彼女の人生はずっと、恐怖でいっぱいだった。水がこわかった。息がつかまるのではないかと恐れて、錠剤を飲み込むことができなかった。飛行機にもこわくて乗れなかった。暗闇もこわかった。そして死ぬのが何よりも恐ろしかった。最近、彼女の恐怖心はますますひどくなっていた。安心できるようにと、アパートの戸棚の中で寝ることもあった。ベッドに入っても、二時間も三時間も眠れないことが多かった。眠れたとしても、眠りは浅く断片的で何度も目を覚ました。悪夢に悩まされたり、寝ぼけて歩きまわるという子供の頃のくせが、再び起こり始めていた。こうした恐怖や強迫観念は彼女を追いつめ、キャサリンの気持ちはどんどん落ち込んでいった」（山川訳）。そこで、子供時代を思い出させて、根本原因を探るという標準的療法が取られたのですが、彼女は少しも良くならなかったのです。そのため、次に催眠療法が行われ、三歳の時のひどい事件（父親による性的虐待）が思い出されたのですが、それでもやはり良くなりませんでした。

ところが、次回に、「あなたの症状の原因となった時まで戻りなさい」と指示された時、彼女は何と、一気にはるかな過去世へ飛び込んだのです。

「アロンダ……、私は十八歳です。建物の前に市場が見えます。かごがあります……かごを肩に乗せて運んでいます。私達は谷間に住んでいます……水はありません……時代は紀元前一八六三年です。」そして、ワイス博士が何年か先に進むように指示すると、「私は二十五歳です。私にはクレアストラという名前の女の子がいます……彼女はレイチェルだわ（レイチェルは現在の彼女の姪である。二人はとても親密な関係にあった—原注）。」これを聞いた彼は、過去世など全く信じていなかったのも、びっくり仰天します。曰く、「それまで、何千人も精神病の患者を診てきたし、催眠療法も教え切れないほど行なったが、こんな見事な幻想には、夢の中の場合でさえ、一度も出会ったことがなかった。」その驚きのほどが、察せられるでしょう。

次いで、もっと先へ進めて、死ぬ場面へ行くようにと、指示が与えられます。「大きな波が木を押し倒してゆきます。どこにも逃げ場がありません。冷たい。水がとても冷たい。子供を助けないと。でも、だめ……子供をしっかり抱きしめなければ、おぼれそう。水で息がつまってしまった。息ができない、飲み込めない……塩水で。赤ん坊が私の腕からもぎ取られていってしまった。」彼女（キャサリン）はあえぎ、息ができなくなりますが、突然体がぐったりして、呼吸が深く、安らかになります。

そして言いました。「雲が見えます。……私の赤ん坊も一緒にいます。村の人達も。私の兄もいます。」すっかり驚いてしまったワイス博士は、自分の医学的知識と経験を総動員して検討しますが、もちろん説明できません。「自分がほとんど知らない分野、つまり輪廻転生や過去世の記憶といったものにぶつかったのではないかと、私はとっさに思った。でも、そんなはずはない、と自分に言い聞かせた。科学で仕込まれた私の理性が拒否していた。でも、現実目の前でそれは起こっているのだ。私には説明できないけれど、現実を否定することもできなかった。」では、当のキャサリン自身は、どんな宗教観を持っていたのでしょうか。彼女の宗教的立場から、そのような幻想を見たということも考えられるからです。

博士によれば、「彼女の宗教に対する態度は単純で、何の疑問ももっていなかった。伝統的なカトリックの信仰の中で育てられ、彼女は自分の信仰を一度も疑ったことがなかった。カトリックのよき信者として、教義をきちんと守っていさえすれば、必ず天国へ行けると信じていた。そして、カトリックの教えを守らないと、地獄へ行かなければならないと、単純に思っていた。父なる神とその一人子であるイエスが、最後の審判を下すのだ。ずっとあとになって、

キャサリンが輪廻転生を信じていないことに私は気がついた。」少し補足しますと、キリスト教の教えでは、死ぬと「記念の墓」（福音書の言葉）の中で眠るが、「最後の審判」の時に呼び出されて、その後で「天国」か「地獄」へ行くのだそうです。まことに奇妙な考え方ですが、「輪廻転生」を否定した結果、「黙示録」の「最後の審判」と辻つまを合わせるために、墓の中で眠って待つことになった（つまり、後に書き換えられた）のではないのでしょうか。

というわけで、ここからワイス博士の新たな勉強が始まったのです。「この一週間の間、私はコロンビア大学の一年生の時に取った比較宗教学の教科書を読み返してみた。旧約聖書にも新約聖書にも、実は輪廻転生のことが書かれていたのだそうだ。紀元三二五年、時のローマ皇帝、コンスタンチン大帝はその母ヘレナとともに、新約聖書の輪廻転生に関する記述を削除した。紀元五五三年にコンスタンチノーブル（コンスタンチノポリスの英語）で開催された第二回宗教会議において、この削除が正式に認められ、輪廻転生の概念は異端であると宣言されたのであった。人類の救済は輪廻転生を繰り返すことによって行われるという考え方は、巨大化しつつあった教会の力を弱めるものだと、彼らは考えたのである。しかし、初めから、ちゃんとこの概念は存在していて、初期のキリスト教の先達は、輪廻転生の概念を受け入れていた。」前回申し上げたように、初期キリスト教最大の「教父」と言われたアウグスチヌス（354年—430年）を始めとして、彼ら「先達」は輪廻転生説をまだ信じていたのです。

「しかし、私（ワイス）は輪廻転生など、まったく信じていなかった。本当のところ、そんなことを真剣に考えてみたこともなかった。小さい頃、教会などで、人は死んでも魂は存在し続けると教えられてはいたが、それさえ、信じていなかった。」大変率直な告白と言うべきでしょう。彼は真面目な優等生だったので、輪廻転生説の「ヒッピー」などとは、付き合うこともなかったようです。

かくして、その後も繰り返えし行なわれた退行催眠の中で、キャサリンは様々な過去世の様々な場面を思い起こし、それに合わせて博士自身も、多くのことを学んで行きました。

例えば、こんな場面がありました。「カヌーのような舟があります。派手な色に塗ってあります。植民地です。私達はやりや投石器、弓矢などの武器を持っています。とても大きいものです。ボートには奇妙な形の大きなオールがついています。……全員で漕ぐのです。迷ってしまったらしい。あたりは真暗です。明かりはありません。とてもこわい。近くに他の舟もいます（明らかに敵方です）。私は動物がとてもこわい。私達はうす汚れたひどいにおいのする

動物の皮の上で眠るのです。私達は偵察中です。私の靴は妙な形で、まるで袋みたいです。……くるぶしの所でしばってあります。……動物の皮でできています。(長い沈黙) 顔が火でとても熱い。仲間が他の人達を殺している。でも、私はやらない。人を殺したくない。私の手にはナイフがある。」キャサリンは、この時の転生では「男」でした。

「突然、彼女(キャサリン)はのどを鳴らして、あえぎ始めた。敵が彼女に後ろから襲いかかり首のあたりをつかまえて、ナイフで彼女ののどをかき切ったと、彼女は私(ワイス)に語った。死ぬ前に、彼女は敵の顔を見た。それはスチュアートだった。現在のスチュアートとは違う顔をしていたが、その男がスチュアートと同じ人物であることは確かだった。ヨハン(現在のキャサリン)は二十一歳で短い生涯を終えたのだった。」この「スチュアート」という人物は、実は彼女が目下つき合っている男だったのです。

ここで博士は、転生に関して、ある重要な事柄を指摘しています。「前世に登場する人達をよく見て、現在、あなた(キャサリン)のまわりにいる人がいないかどうか、探してみなさいと、私は前のセッション(診療)で彼女に指示していた。多くの人が書いているところによれば、魂のグループというものがあり、そのグループは何回もくり返し一緒に、同じ時代、同じ場所に転生して、カルマ(自分及び他人に対する借り、または学ぶべきレッスン—原注)を果してゆくのだという。」この点に関しては、実際に、多くの情報で同じ事が指摘されています。キャサリンが、最初の過去世で、自分の姪の「レイチェル」に気づいたことを思い出して下さい。

さて、ここで、もう一つの重要なことに触れねばなりません。それは、このような過去世は死で終わるのではない、ということです。つまり、その先というか、転生と転生の「間」(あいだ)の期間があるのであって、それを専門用語で「バルド」(中間生)と言います。

「彼女(キャサリン)は死ぬと再び、体から抜け出して浮かび上がった。しかし、今回は、うろたえたり混乱したりすることはなかった。

『明るい光が見えます。素晴らしい光です。この光からエネルギーをもらうことができます。』彼女は死後、生と生のはざままで休息していた。何分かが沈黙のうちに過ぎた。突然、彼女が話し始めた。しかし、それまでの彼女のゆっくりとしたささやくような声ではなかった。彼女の声は今、大きなしゃがれ声で確信に満ちていた。

『我々の使命は学ぶことである。知ることによって、神に近づく。我々はほとんど何も知らない。汝は私の師として、ここにいるのだ。私は多くのことを学ばねばならない。知ることによって、我々は神に近づき、その後に、休息す

ることができる。そこから、我々は人々を教え、助けるために戻ってくるのだ。』

私は言葉を失った。これは、死後の中間生からの教えだった。」この「中間生」が、いわゆる「あの世」になります。そして、「そこから、我々は人々を教え、助けるために、戻ってくるのだ」とは、多くの転生の後に「マスター」（地球卒業生）となり、今度は「聖人」として、人々を教え助けるために、この世へ戻ってくるということですね。

A氏 — ここの「我々」と「汝」と「私」は、誰を指すのですか。

筆者 — それをはっきりさせるために、もう少し、続きを見てみましょう。

「その時はまだ、キャサリンはただ言葉をしゃべっているだけで、考えそのものは彼女のものではないということに、私は気づいていなかった。彼女は自分に言われたことを、ただ私に伝えていたのである。後に、その源はマスター達、すなわち、現在は肉体に宿っていない非常に進化した精霊たちであると、彼女は突きとめた。彼らは彼女を通して、私に話かけることができたのだった。キャサリンは過去生へさかのぼることができただけでなく、今や、向こう側の世界から知識をチャネル（伝える — 原注）することができたのである。」以上と先ほどの文を考え合わせると、「我々」は、人間全般のことであり、「汝」がワイス博士で、「私」がキャサリンということになりますね。かくして、ワイス博士の目の前に、それまで全く知らなかった新しい世界が開けたのです。

D氏 — 先ほど、「人間は誰でも『守護神』がついている」ということでしたが、マスターとどう違うのですか。

筆者 — 同じなのですが、少し分かりにくいかも知れませんね。よく「守護神」と言われているのは、本人の「ハイヤー・セルフ」（上位自己）と、本人の進化のレベルに適した「指導霊」（ガイド）を指します。従って、ここでの「マスター」は、「ガイド」でしょう。

D氏 — もう一つ、いいですか。いわゆる「魂」と「ハイヤー・セルフ」の関係は、どうなっているのですか。

筆者 — これも分かりにくい点があるのですが、それは「魂」が非常に広い意味で用いられるためでしょう。まず、肉体と密着したレベルでは、「心」とか「意識」とか「精神」と呼ばれます。そして、肉体を越えたレベルでは「ハイヤー・セルフ」と呼ばれて、そこには様々な階層があり、上へ行くほど高位の「神」になるわけですね。そして、これらを一まとめにして、「魂」とか「スピリット」とも言っているのですから、分かりにくいのも無理はありません。これらのことは、なぜかどの本にも明快な説明がありませんね。大切なこ

とだと思うのですが。

話を戻しますが、その後もキャサリンの治療は続いて、その中で、博士の死に対する認識も次第に深まって行きます。

「死や死後の世界に対する彼女の考え方が、転生のたびごとにまったく違っているのが、とても興味深かった。それなのに、彼女の死そのものの体験は、いつもまったく同じだった。死の瞬間の前後に意識体が体を離れ、上に浮かんでから、すばらしいエネルギーに満ちた光の方へと引き寄せられてゆく。それからしばらく、誰かが助けに来てくれることを待っている。魂はそのプロセスを自動的に経てゆくのだ。香油を塗ったり、埋葬したりする死後の儀式は、何の関係もなかった。それは自然に起こることで、何の準備もいらなかった。ちょうど、開いているドアを歩いて抜けるようなものだった。」このように、死そのものは、非常に簡単な、楽なことであるとお考え下さい。一番苦しいのは、死ぬ時ではなく、生まれる時だと言われています。

ところで、キャサリンはその後で、博士個人にとって、まことに驚くべきことを語り始めました。これも、ぜひお聞き下さい。

「彼女の頭がゆっくりと左右に揺れ始めた。何かの情景を調べているようだった。彼女の声がまたしわがれた大声になった。

『神はたくさんいる。なぜなら、神は我々一人ひとりの中にあるからだ。』

私はこの声は中間生から来ているのだと思った。しわがれた声になり、メッセージが急に確信に満ちた霊的な調子になったからだ。次に彼女の口から発せられた言葉に、私は息が止まり、心臓が引っくり返ってしまった。

『あなたのお父様がここにいます。あなたの小さな息子さんもいます。アブロムという名前を言えば、あなたにわかるはずだと、あなたのお父様は言っています。お嬢さんの名前はお父様の名前からとったそうですね。また、彼は心臓の病気で死んだのです。息子さんの心臓も大変でした。心臓が鳥の心臓のように、逆さになっていたのです。息子さんは愛の心が深く、あなたのために犠牲的な役割を果たしたのです。彼の魂は非常に進化した魂なのです。……彼の死は、両親のカルマの負債を返しました。さらに、あなたに、医学の分野にも限界があること、その範囲は非常に限られたものであることを、彼は教えたかったのです。』

キャサリンは話すのをやめ、私はおごそかな沈黙の中にすわり込んでいた。そして、ぼんやりした頭で、必死で考えようとしていた。部屋の中が氷のように冷たく感じられた。」これを聞いて、様々な疑念が起こるかも知れませんが、キャサリンはワイズ博士について、精神科医であること以外は何ひとつ知らなかったそうです。

少し長くなりますが、今度は彼自身の打ち明け話を聞いてみましょう。

「私の人生の最大の悲劇は、一九七一年に起こった。私の初めての息子が、生まれてたった二十三日で死んでしまったのだ。その子の名前はアダムと言った。赤ん坊を家へ連れ帰ってから十日ほどたった頃、彼は呼吸困難を起こし、さかんに吐くようになった。診断をつけるのはきわめて難しかった。『心房隔壁欠損を伴う肺の静脈排血異常』だと言われた。一千万人に一人の異常だそう。肺静脈、すなわち、酸素を取り入れた血液を心臓へ送り返すはずの血管が、誤って心臓の逆の方へつながってしまっていたのだ。ちょうど、心臓が後ろの方へ引っくり返ったようになっていた。本当に、ごくごくまれなケースだった。

思い切って開胸手術を試みたが、それもアダムの命を救うことはできず、彼は数日後に亡くなった。私達は何ヵ月も嘆き悲しんでいた。夢も希望も打ち砕かれた思いだった。一年後に息子のジョーダンが生まれ、私達の傷をやっといやしてくれたのだった。

アダムが亡くなった頃、私は精神科医になろうと決心したことがよかったかどうか、迷っていた。内科のインターンの仕事は楽しかったし、内科の研修医にならないかと誘われていた。アダムが死んで、私ははっきりと、精神科医を自分の仕事にしようと決心したのだった。近代医学がその最新の知識と技術をもってしても、私のけなげな小さい息子の命を救えなかったことに、私は腹を立てていた。

私の父は一九七九年のはじめに、六十一歳でひどい心臓発作に見舞われるまでは、健康そのものだった。最初の発作はどうか持ちこたえたものの、心臓の壁が回復不可能なほどだめになり、三日後に亡くなった。これは、キャサリンの最初の診療の約九ヵ月前のことであった。

私の父は宗教心の厚い人だったが、精神的なことよりは、儀式を重んじる方だった。彼のヘブライ名はアブロムと言ひ、英語名のアルビンより、ずっと彼には似合っていた。彼の死後、四ヵ月たって、娘のエイミイが生まれた。彼女の名前は、父のアブロムにちなんで命名されたのだった。」それ故彼は、先ほどのキャサリンの言葉を、「鳥肌が立つ思い」で聞いたのです。

「『誰?』私（ワイス）はあわてて言った。『誰がそこにいるのですか? 誰がこんなことをあなたに教えてくれるのですか?』

『マスター達です』と彼女は小声で言った。

『マスターの精霊達が私に教えてくれます。彼らは私が肉体を持って八十六回、生まれていると言っています。』」彼はそう言われても、なかなか信じる事ができなかったのですが、事実は否定しようがありませんでした。そし

て、遂にそれらを受け入れた時、彼は自分の中に大いなる愛を感じ、すべてのものとの一体感を感じたと言います。

ここに至って、彼の人生がすっかり変わってしまったことは、想像に難くありません。「それまで、注意深く批判的に一定の距離を置いて読んでいたたくさんの方が、すべて納得できてしまった。キャサリンの過去生の記憶もメッセージも本当だった。キャサリンの体験は本当なのではないかという私の勘も、正しかった。私は事実を掌握したのだ。証拠を得たのだった。」そのような喜びと悟りに対して、「以前の慣れ親しんだ論理的な考え方と懐疑心が、私の心の中で反対を唱え」たが、「今度ばかりは、私の頭は私をだますことはできなかった。」誰しものが経験するように、大きな変化には、必ず「揺れ」が伴うものです。

以上は、「前世療法」の、ほんの一部を取上げただけですから、ぜひ全体を直接ご覧になって下さい。

A氏 大変面白いお話でしたが、それで肝心の、キャサリンの病気の方はどうなったのですか。

筆者 話が錯綜しますので、彼女の治療については触れませんでした。その強度の強迫観念や不安症は、三ヶ月半のセッションで完全によくなったそうですよ。そればかりか、彼女は「輝くばかりに美しくなり」、人々が「引かれるように集まってくるようになった」ということです。

A氏 単純な疑問かも知れませんが、過去世を思い出すと、なぜ病気が治るのですか。

筆者 一実は、それは大変難しい問題でして、当のワイス博士自身、よく分からないと言っています。しかしながら、恐怖や憎悪などの感情は、本来きわめて強力なエネルギーですから、もし表現されずに潜在意識の底に封じ込められますと、次の転生へ持ち越されて行きます。そして、本人の自覚がないまま、そのエネルギーは出口を求めて、心と、その延長の肉体に多大な影響を及ぼすことになるでしょう。その時に退行催眠で、その原因となった出来事を思い出すと、そこに出口ができて、長年とじこめられていたエネルギーが解放されるので、必然的にその症状も消え去るのではないのでしょうか。

なお、ワイス博士は、この時の治療体験を書き始めるまでに、実は四年の歳月がかかりました。それは何故かと言えば、このようなまだ学会で認められていない情報を公表するのは大変勇気のいることでして、決心するまでに、これだけの時間が必要だったのです。

「ある日、シャワーを浴びている時、私は突然、自分の体験を書かなければいけない、と思った。事実を書くのは今だ、もうこれ以上隠しておいてはいけ

ない、と強く感じたのである。」インスピレーションは、様々な時に様々な形で受けますが、彼もまた、特別な使命を与えられた一人だったことが分かります。

D氏 — この前世療法は、日本でもやっているのですか。病気でなくとも可能ならば、何となく受けてみたい気もしますが。

筆者 — ええ。そう考える方はたくさんいるようで、アメリカでは大変盛んだそうです。日本でも、最近是一部で行なわれているようですが、ただ退行催眠は、誰でも過去世を思い出すわけではないみたいです。ワイス博士もインタビューで、同じことを聞かれたのですが、それによると、過去世まで行けるのは被験者の三ないし五パーセントと、かなりまれなケースだそうです。

D氏 — ちょっと少ないですね。もう少し、誰でも可能な方法があったらと思うのですが、無いものねだりかな。

筆者 — それが、実は無いわけではなく、最近では誰でも「体外離脱」が可能な、科学的方法が開発されているのですよ。（二人とも無言で筆者の顔を見る）

どのようなものかと言いますと、アメリカの著名な体外離脱能力者にロバート・モンローという人がいるのですが、彼は自分で「モンロー研究所」を設立して所長になり、自らが開発した「ヘミシンク」(Hemi-sync) と呼ばれる音響技法を用いて、意識の拡大を物理的に起こす研究を行なったのです。それは、人間の意識を普段の覚醒状態から「変性意識状態」(覚醒状態からズレた状態) に持って行くことによって、いわゆる死後の世界が誰でも体験できるテクニックだということですから驚く外はありません。

D氏 — その、変性意識というのは、例えばどんな状態を指すのですか。

筆者 — 普通は眠っている時とか、坐禅のような瞑想中の意識状態を言いますが、死後の世界の意識もこの中に入って、この状態の時にガイド（指導霊）との交信や、過去世の追体験が可能になるようです。前回ご紹介した、あのキューブラー・ロス氏も、ここで体外離脱を体験したとか。彼女はターミナル・ケア（末期治療）の権威として知られる人ですから、立場上患者から「臨死体験」を聞く機会も多く、こちらの方へ向かうのは必然であったと言えるでしょう。今では、「精神世界」の代表的スプークスマンの一人です。

A氏 — シャーリー・マクレーンの時は、確か「幽体離脱」だったと思いますが、「体外離脱」も同じ意味かしら。

筆者 — ええ。以前は「アストラル・プロジェクション」(幽体離脱) と言っていたのですが、その後「アウト・オブ・ボディ」(体外離脱) と言うようになりました。

続けますが、このモンロー研究所は有名になって、世界中から様々な人が来

るそうですが、日本人では坂本政道氏が、ここで各種のコース（「フォーカス」と呼ばれる）を受けて、それを二冊の本（「死後体験」と「死後体験II」）で報告していますので、簡単にご紹介しておきましょう。

彼は一流企業のエリート・エンジニアでしたが、自ら「体外離脱」を何回も経験したために、唯物論者であるにもかかわらず死後の生を確信するようになりました。そして、更に変性意識の研究に専念するために四十六歳で退社して、その後モンロー研究所へ何度も研修に行くようになったという、この方面の先駆者の一人です。要するに、モンロー研究所で研修を受けるために会社を辞めたわけですね。この研究所には、彼だけでなく、他にも続けて通っている人が何人かいるそうです。

そこで先ず、「意識」とは何かですが、モンロー説を紹介した坂本氏の説明を分かりやすく要約しますと、光は周波数の違いによってスペクトル（虹のように、波長の違いが目に見える形になったもの）になるが、それでも光は連続体であるように、意識もまた、周波数が違っても一つの連続体であること。例えば、ラジオで選局する時、ある特定の周波数にチューニング（同調）すると声や音が聞こえるように、意識も、覚醒時には物質界にチューニングされるのである。そして、意識が別の周波数にチューニングされると、もはや物質界は認識されず、別の世界が現われるのだが、モンロー氏のヘミシンクは、この意識のチューニングを意図的に行う。ということなのですが、では、その「ヘミシンク」とは何か。

それは「バイ・ノーラルビーツ」（両耳うなり）と呼ばれる音響技術の一つであって、ヘッドフォンを使って左右の耳に異なる周波数の音を聞かせると、その差に当たる周波数の「脳波」が発生する（「脳波」は、脳の神経細胞が働く時に微量の電流が起こるが、その変化を記録したもの）。その時に、脳内の脳波の分布がきれいに左右対称になるので、左右の半脳が同調しているという意味から、「ヘミシンク」（Hemiは「半」で、syncは「シンクロ」）と呼ばれる。そして脳波は、よく知られているように、周波数によって「ベータ波」（13ヘルツを越えて40ヘルツまで）、「アルファ波」（8ヘルツ以上13ヘルツ以下）、「シータ波」（4ヘルツ以上8ヘルツ未満）、「デルタ波」（0.5ヘルツ以上4ヘルツ未満）に分類される（「ヘルツ」は、一秒間に繰り返される波の数）。この脳波と人間の意識には相関関係があることもよく知られており、意識が活動状態にある時はベータ波が主であり、目を閉じてリラックスしている時はアルファ波、坐禅などの瞑想状態ではシータ波、深い睡眠時はデルタ波が主である。ところが「ヘミシンク」は、それとは逆に、脳波をアルファ波が主となるようにすることで、リラックス状態を作り出し、デルタ波を中心とする

ことで、熟睡状態にする。具体的には、「ヘミシンク・テープ」を聞くことによって、自動的に変性意識状態を作り出すのですが、初めに言いましたように、それによって自分の過去世の追体験や、ガイドやハイヤー・セルフなど自分の高次元の存在との交信や、死後の世界の探求などが可能になるというものです。

その学習コースは、様々な「フォーカス・レベル」に分かれており、先ず最初は「フォーカス10」（体は熟睡しているが意識は明瞭な状態で、体外離脱が可能）から始まって、「12、15、18、21、23、24～26、27」（最後の「フォーカス27」は、霊的に進化した人の世界）まであり、その後さらに「34、35」（宇宙の探索）、そして「42」（太陽系外）と「49」（銀河系外）が開発されました。

D氏 — 大変スケールの大きなお話ですが、その「ヘミシンク」による体験は、具体的にはどんなものなのですか。これまでのものと同じなのか、それとも何か違うのですか。

筆者 — それは非常に説明しにくいことですが、退行睡眠の場合とは、明らかに違いますね。また、意識が残っているので、坂本氏も、完全な「体外離脱」ではないと言っています。彼は言葉で表現することが難しい色々な映像を見たそうですが、それは鮮明であっても何を表わすかは分からないことが多く、後で、ガイドなどが自分の成長をうながすために象徴的な映像を見せたのだと気づくことが多かったそうです。そのようなわけで全体的に難しく、直接読んでいただくしかありませんが、この方法は、自分で動機を持って積極的に取り組む人に向いたもので、ただ漫然と参加したのでは、何も得ることなく終わるかも知れません。いずれにせよ、壮大な可能性に満ちてはいるが、まだ開発途上の未完成のものという印象ですね。

D氏 — 例の「ビッグ・ムーン派」の人たちは、どう考えるでしょうね。

筆者 — では、この類の、いわゆる科学的に証明できないものをどう評価するかについて、ここで少し考えてみましょうか。

坂本氏自身も、最初の「死後体験」（平成15年発行）を出した後で、かなり否定的な意見を寄せられて、書いてあることは全くの夢や幻覚なのではないか、少なくともそうではないとは証明できないという指摘を受けたそうですが、これは、この種の事柄に対して必ず起こる反応なので、避けることはできません。勿論、それが夢や幻であるとも証明できないのですが、それは問題にならないのです。何しろ、「ビッグ・ムーン派」は多数派ですからね。

これに対して、坂本氏は次の「死後体験II」（平成16年発行）の中で、こう反論しました。「世の中には、科学的に存在が証明されたことしか信じない人

たちがいる。証明されていないことはすべてウソだ、幻覚だとして受け入れない人たちである」が、「そういう人たちは、今の科学がこれ以上進歩しないと考えているのだろうか。なぜなら、今までに存在が証明されたことしか存在しないのなら、これから発見されることは存在しないからである。」例えば、「彼らの論理に従えば、物理学の最先端で議論されている海のものとも山のものともはっきりしないような新しいアイデアや新しい素粒子はすべてウソということになる。」前回のB氏によれば、「『量子力学』のような似非（えせ）科学など、まともな科学者は相手にしないよ」ということです。しかし、量子力学の実験が難しいのは、相手が物質を越えたものであるからで、これを物質でできた測定器で捉えようとするのは、ザルで水をすくうことに外なりません。これで水の存在が否定できるのでしょうか。「このように、科学的に存在が証明されたことしか信じないと言う人たちは、科学的ではない。むしろ彼らは既存の出来上がった科学を信奉する宗教家である」（坂本）。それ故、私はB氏に対して、「科学教」だと申し上げました。従って、「真の科学者とは未知の分野に果敢に飛び込み、未知を既知へと変える努力をする人を言う」（坂本）。

かつて「地動説」が出た時も、大勢の人が嘲笑しました。いつの世でも、「ビッグ・ムーン派」（大いなる夢を見る人）は健在なのです。しかし、その一方で目ざめた少数派も常に存在し、例えば「退行催眠療法」（前世療法）の草分けとして知られるグレン・ウィリストン博士は、こう断言しました。

「私は、『誰もがこれまでに、たくさんの肉体を持ち、さまざまな場所、多種多様な環境で、数多くの人生を経験してきたのだ』と、何のためらいもなく断言することができる。そして、それらの人生はすべて、『意識体』としての私たちの成長の過程なのである。

したがって、私は、俗に言う『魂』の存在と『生まれ変わり』の存在に、これっぽっちの疑いも抱（いだ）いていない。催眠療法などによる過去世退行を何千回も経験すれば、それだけで、十分な説得力があるからだ。この現象に対して、ほかにどのような説明を加えようとしても、『生まれ変わりが真実である』という説明に比べると、不合理だからである。

本書の目的は、『生まれ変わり』を信じない人々の心を変えさせることではなく、人々を目覚めさせ、スピリチュアルな力を感じ取ってもらうことにある。スピリチュアルな能力は、すべての人間が、生まれつき持っている権利だからだ」（飯田訳「生きる意味の探求」）。非常に明快ですね。反対する人に、それを信じさせる必要などはないのです。では、私のしていることは何かとおっしゃるかも知れませんが、これは単なる「老婆心」にすぎず、要するに「余計なお世話」ですね。これを称して、おシャカ様は、「煩惱」と言いません

でしたか。ハッハッハ。

D氏 — 立花さんの「臨死体験」については、どうお考えですか。一時評判になった時に、友人に勧められて読んだのですが、とにかく大変な博識であり、また殆どの臨死体験は疑わしいとする鋭さにも驚きました。

筆者 — 大変な博識であり、ぼう大な資料を駆使した労作であることは間違いありません。ここで、その対象となるのが「体験者たち」ですが、その殆どは、それによって人生観が変わるほどの決定的影響を受けて、強い確信を抱いている人たちです。そのような「確信犯」に対して、当のスタンディング・フラワー裁判長は、思いもよらぬ疑念を抱いて、それによってそのケース全体を「灰色」とする大変な潔癖さを見せます。曰く、こんな可能性もあるかも知れない、証人がいない、いても信用できない、証拠がすべて揃っていても自分が直接確めたものではない、等々。かくして、どんなに確かなケースも「灰色」となり、完全な「白」は一件もありませんでした。一方、「臨死体験」の本人だけでなく、研究者たちの中にも、長年の研究の中で確信に至る人たちがかなりいるのです。先ほどのムーディ博士を始めとしてですね。そこで公正なスタンディング・フラワー（決まり文句）裁判長が最終的に下した判決は、次のようなものでした。「（臨死体験について）私も基本的には脳内現象説が正しいだろうとは思っているものの、もしかしたら、現実体験説が正しいのかも知れないと、そちらの説にも心を閉ざさずにいる。」

勿論、それは常識的には、非常に穏当な見解であると言うべきなのでしょうがね。しかし、何を証拠とするかは、心が決めるものなのでしょう。本当の証拠は、外ではなく中にあるのです。また、この臨死体験を脳内現象と呼ぶならば、その外の諸々の現象は一体何なののでしょうか。多くの人が、それらは自分の外に、自分とは別個に存在していると考えていますが、これまでの論の流れからすれば、そうではなくて、全てが脳内現象なのではありませんか。要するに、肉体と一体化したエゴは、本当はすべての現実を自分が作っているのに、この現実がヴァーチャル・リアリティーであることに気がつかないのです。現実が自分の外にあると考える方は、それを見ているのは誰なのかを考えてみて下さい。もし自分以外の人たちも見ていると考えるのであれば、その人たちを見る視点はどこにあるかを考えて下さい。例えば、唯物論の人はよく、自分は死んでも他の人たちの記憶の中で生き続けるのだから、自分は無にはならないのだ、つまり存在しているのだと言いますが、それが自分を慰めるための自己欺瞞でしかないのは明らかでしょう。その、自分を記憶している人たちを見るのは誰なののでしょうか。まさか、草葉の陰から見ているとは言わないでしょうね（笑声）。

かくして、唯物論は虚無主義となり、それならば生きているうちに出来るだけ楽しんでおこうと、快樂主義に走るわけですが、もし本当にすべてが無で終わるならば、生前に苦しもうが楽しもうが、そんなことは全く関係がないことに気づく必要があるでしょう。一瞬後には、苦しかった一生も楽しかった一生も、何ひとつ残らないのですからね。誰がそれを記憶しているのでしょうか。広大なこの宇宙も、一場（いちじょう）の夢ですらありません。夢ならば、その夢を見る者が存在しますからね。デカルトの「われ思う故にわれ有り」は、この、ぎりぎりの存在を言ったものです。

とは言え唯物論者も、その論が自分たちをどこへ導くのか、最初からすべて分かっていたわけではないでしょう。実は、この問題には、人間の「エゴ」（自己）が深くかかわっていることに気づかねばなりません。つまり精神主義では、エゴは精神の支配下にあるのですが、エゴ自体は、何としても自分が支配者になって、自分の様々な欲望を満たしたいと思っているのです。そこで一人ひとりの中で、この支配権をめぐる壮絶な闘いが起こり、その時にエゴが勝つと、精神を完全に支配下におきます。かくして唯物論が唱えられるようになったわけですが、その結果どうなるかまではよく考えていませんでした。本当は誰でも永遠に生きたいのであって、死んで無になどはなりたくありません。かくして、エゴが勝利した近代以降の長い歴史の中で、人々はようやく唯物論の矛盾と呪縛に気づき始めたのです。それに対して、従来の考え方に固執する人々は、本能的に身の危険を感じて、様々な超常現象などを声高に否定して氣勢を上げている、というのが今の有様ではないでしょうか。このドラマは、本当は「外」ではなく、各自の「内」で起きているのですがね。

そのようなわけで、先ほどの老婆心から申し上げますと、エゴには自分を見る視点がありませんので、自分がエゴであることを知りません。そこで、自己投影とは気づかず、もっぱら他人を批判するわけですね。そのようなエゴにとって、真実を知ることは恐ろしいことであり、幻想の中にいた方が居心地がよいのですが、自分が進歩するためには、思い切って勇気をふるわねばなりません。つまり、殻を破って「外」へ出るために、自分の「中」へ入らなければならないのです。楽をすれば眠りにつながり、眠りこそは本当の死であると言えるでしょう。もし卒業に近い人生であるならば、瞬間ごとに命がけの決断と実行を繰り返し、満身創痍で突き進む時かも知れませんね。それに対して、この期（ご）に及んでも、すべてを疑いの目で見ただけの人生は、あまりカッコよくないのではないのでしょうか。と言うのも、進化の上で、「惑星の次元上昇」は千載一過どころか、地球始まって以来のビッグ・チャンスなのですが、人類がこのようなチャンスに巡り合うのは、この地球が始めてではないからで

す。多くの人は忘れていても知れませんがね。

A氏 — 一体、どういうことですか。おっしゃっていることが、さっぱり分かりませんが。

筆者 — 以前に、地球人も宇宙人であると申し上げたことがあります（「文芸と思想」64号の「宇宙のワンダラー」）、それは、地球も宇宙の星の一つだからという意味ではなく、地球人は、文字通り他の星から来たということなのです。それ故、「スターシード」と呼ばれているのですが、これについては、「アーキエンジェル・マイケル」（大天使ミカエル）をチャネリングするロナ・ハーマン氏の「聖なる探求 上巻」を見て下さい。「スターシードという言葉は、地球に住む多くの存在は他の太陽系や銀河系、いや、他の宇宙の出身ですらあるということを意味します」（大内訳）。

A氏 — （少し白けた表情で）そのテーマは、私にはよく分かりません。可能性としては、この広い宇宙のどこかに人間に似たものがあるかも知れませんが、実際はSFの世界の話で、具体的な根拠や証拠は何もないでしょ。

筆者 — （笑いながら）いえ、実際は根拠も証拠も大ありなのです。いわゆる宇宙人と言われる「知的生命体」は、「黒船」ならぬ「白船」でやって来て、地球に開国を求めたのですが、彼らの超ハイテクを恐れた地球の支配者たちは、これを拒否しました。そして、一般の人たちには必死で隠してきたのですが、既にかなりの方が知っているのが実状です。特にUFO大国のアメリカではもはや隠しきれず、「未知との遭遇」や「E. T.」などの映画によって、いまや社会常識化しつつあると言えるでしょう。

そもそも、この満天の夜空の星が、人間の夜の無聊（ぶりょう）を慰めるために存在するとお考えでしょうか。イエスも、こう言ったではありませんか。《Dans la maison de mon père il y a beaucoup de demeures》：「わが父の家には多くの住居あり」（ヨハネ伝、14章2節）。イエスの「父」は、言うまでもなく「神」ですから、その「家」とは、宇宙そのものに外なりません。そして、そこには数多くの「知的生命体」が住んでいて、その中の一つに「ヒューマノイド」（人間型生命体）があるのですが、さらに高度の生命体は、他に幾らでも存在するようです。そこで、イエスの教えも、宇宙の一般常識に過ぎないと言われているのですが、では、実際にはどのような宇宙社会があるのでしょうか。「ヒューマノイド」についてだけですが、その概略を見てみましょう。

この銀河（天の川）における「ヒューマノイド」の歴史を一言で語ることは勿論できませんが、無理を承知で言いますと、人類は先ず「琴座」（リラ）で誕生して、そこから近隣の星へと広がって行きました（リサ・ロイヤル、キー

ス・プリースト共著「プリズム・オブ・リラ」など)。その主な所は、「ベガ」(琴座の恒星)、「アペックス」(琴座の惑星)、「シリウス」、「オリオン」、「プレアデス」(地球人はプレアデス人の遺伝子の提供を受けたために、事実上の兄弟関係にある)、アルクトゥルス、レチクル座ゼータ星などであり、そこに彼らの宇宙文明が築されました。そして、数多くの戦いと転生の繰り返しのなかで、多くの者が戦いをやめて「アセンション」(次元上昇)して行ったのですが、最後まで戦い続けた人たちもいました。そのような人たちのために、最後の場として、地球という特別な場所が用意されたのです。その頃楽園であったこの美しい星で、闘いという「分裂」を乗り越えて、ついに「統合」に達し、積年のカルマの精算を完了するという計画でしたが、今回の「次元上昇」までに完了することは不可能であることが明らかとなり、そこで先ほど申し上げたように、「カルマの法則」の撤廃という非常措置が取られることになりました。それ故、今回の「次元上昇」を望まぬ人たちは、さらなる戦いを続けるために、目下、他の星へ行くことを選択している最中だそうです(ロナ・ハーマン著「黄金の約束 上巻」など)。

そのようなわけですから、今生で初めて生まれたと思い、どうせ間もなく死ぬのだからと、うかうかと時を過ごすのは如何なものでしょうか。

5 「カルマの法則」を知る

筆者 — では本題に戻りまして、Aさんの最初のご質問の、「神も仏もあるものか」(本当は筆者の言った言葉)は、以上からして再び、「世の乱れは神や仏の責任ではない」という答えになるのですが、まだ納得は難しいですか。

A氏 — そうねえ……。うまく言えないのですが、私が言いたいことと、どこか違う気がして。

筆者 — 分かりました。最初からずっと、どこに問題点があるのかを探りながら話を進めてきたのですが、Aさんのおっしゃりたいのは、こういうことではありませんか。もし、すべてが自分の選んだ結果であるならば、神ではなく自分の責任なのだという事は、その通りである。しかし、それならば、人間の選んだ結果が何故このように意に反したものになっているのか、それが分からないと。

A氏 — (いささか興奮ぎみに) そう、それですよ、私が言いたかったのは。今の世の中がこのままでいいなんて、誰も考えていないと思いますけど。それどころか何とかしなければ、どうにもならなくなっているんじゃないですか。それを、自分で選んだ結果だなんて言われても、とてもじゃないけど納

得できませんよ。

筆者 —（笑いながら）ええ、分かります。ここで問題になるのが、正に「カルマの法則」なのです。それと、「自分」とは何かですね。

D氏 — 「カルマ」という言葉はよく聞きますが、あまり考えたことがありませんね。「宿命」と同じような意味ですか。

筆者 — そのような意味で使われることもありますね。仏教では、「カルマ」は「業」（ごう）と訳されますが、サンスクリットの「カルマン」（karman）から来た言葉で、広く「行為」を意味します。そして、紀元前七世紀前後の「ウパニシャッド」（奥義書）において、「輪廻思想」と結びつきました。輪廻の原語の「サンサーラ」（samsāra）は、「流れる」であり、そこから「さまざまな（生存の）状態をさまよう」こと、即ち生死を繰り返すことを指すようになります。そして、その時に、「カルマ」は単なる行為にとどまらず、死後にも潜在的な力となって残存し、人の来世の善悪のあり方を定めるものと考えられました。ウパニシャッドの哲人ヤージニャヴァルキアによれば、「徳のある人は、（前世の）徳のある行為（業）によって生じ、悪人は悪しき行為によって生じる」ということです（『岩波仏教辞典』より）。要するに、私たちの「選択」とは、この世の選択以前の、前世の選択が土台となっているということです。

そして、この「カルマ」の存在を知るためには、先ず「死」が何であるかを知らねばなりません。「死」ですべてが終わるならば、当然、「カルマ」は問題になりませんから。

前回、死の専門家であるモンテーニュとキューブラー・ロス氏に語ってもらいましたが、同じく前回ご紹介したベンジャミン・クレーム氏は、「マスター」に教えられたことに基づいて、更にその先の、死の真相を明らかにしています。「人間存在について我々が持つ最大の悲劇の一つは、死と呼んでいるあの絶えず繰り返される出来事に対する我々の姿勢である。殆どの場合、我々はそれに対して恐れと嫌悪を抱きながら対処し、（中略）その訪れに対してあらゆる手段を用いて抵抗しようとする」（石川訳「マイトレーヤの使命 第一巻」）。

では、なぜ恐れるのでしょうか。「死に対する我々の恐怖は未知への恐怖であり、完全な徹底的な消滅、『もはや何もなくなってしまう』ことへの恐怖である。」

私たちのそのような恐怖は、はたして何らかの根拠があるのでしょうか。「この態度が非常に悲劇的なのは、それがリアリティ（事実）とはほど遠いものであり、非常に多くの不必要な苦難の源になっていることである。死に対す

る我々の恐怖は、我々のアイデンティティーが消されてしまうことへの恐怖である。我々が、永遠なる存在としての我々のアイデンティティーを認識しそして経験するならば、死の恐怖は消え去ってしまうだろう。」

D氏 — この「経験」とは、死ねば分かるということですか。意味が何か変ですが。

筆者 — この「経験」は、原文ではイタリックになっており、「体外離脱」や「臨死体験」を指すものでしょう。

続けますが、「死の過程は魂が濃密な肉体からそのエネルギーを引っ込めるときに始まる。(中略)死が起こるや否や、精妙なからだ＝エーテル体の中にある情緒体(アストラル体)とメンタル体＝は濃密な肉体から引き上げる。」精神世界では、人体が肉体の他、エーテル体やアストラル体、メンタル体、その他の、次元に応じて異なる周波数の体を持つことはよく知られており、それ故に、前回も申し上げたように、「ご本尊は十二単(ひとえ)を着ているぞ」(ひふみ神示)と言われているのです。

では、私たちの意識の方はどうなるのでしょうか。「個人の意識はエーテル体の中に残され、やがてそれ(エーテル体)もまた捨てられる。(中略)エーテル体が捨てられるとき、アストラルの鞘がその個人に情緒界(アストラル界)での意識を与え、その人の情緒的特質に相応する七つのアストラルレベル(亜界)のいずれかにおいてしばらく留まるだろう。」この「アストラル界」が、四次元の世界であり、いわゆる「あの世」に外なりません。高度に進化した人はもう一つ上の「メンタル界」まで行きますが、このような死後の世界(霊界)において、次の転生の準備がなされるのです。

そして、「すべての魂は『再生誕の法則』の下に転生し、そして再び転生する。魂は過去につくったカルマを片付けるために、グループとして一緒にやって来る。故にこの法則が(次の「機会を提供する」)、大昔の負債を支払い、昔の友人たちを認知し共に働き、昔の責任と義務を受け入れ、そしてずっと昔に身に付けた才能や特質を再び利用するために表面に持ち出すための機会を提供するのである。」「再生誕」(Rebirth)は「輪廻転生」(Reincarnation)と同じですが、それはその魂の進化のレベルに見合ったもので、さらなる進化を目ざしてセッティングされます。従って、多くの人は幸福になるために生まれたのだと考えていますが、本当は「カルマの返済」によって進化することが第一目的であることを知らねばなりません。本当の「自分」は、下位の自己である「エゴ」ではなく、上位の自己の「魂」なのです。

かくして、意識の進化が常に問題になるわけでした、それを実現するのが「カルマの法則」なのです。「私たちの思考と行動のすべてがこの法則の下で原

因を始動させるので、私たちは始終原因をつくっています。これらの原因に対する反作用、つまりこれらの原因から生じている結果が、良きにつけ悪きにつけ、私たちの人生をつくっているのです。この瞬間に私たちは今の一生の今後と来世をつくっているのです。カルマの法則は原因と結果の法則です」（「マイトレーヤの使命 第三巻」）。

（A氏に）ここまでの所は、いいですか。

A氏 — 大体は、ですね。それにしても、様々な思いがけない事故や病気が起こるのは、一体なぜですか。これは明らかに私たちが選んだものではないと思うのですけど。

筆者 — （少し苦笑しながら）そうですね。確かに、これらのことは、私たちが望んだようには見えません。しかしながら、S. マクレーンは先ほど、こう言っていましたね。「私たちの人生に起きてくる悲劇的な事件さえ、確かな理由があって起こっているのです。その確かな理由というのは、私たち一人ひとりの成長のために必要だからこそ起こっているということなのです。」つまり、私たちの魂が望んで、それらのことを引き起こしているのですよ。

A氏 — そんな馬鹿な……。

筆者 — 「肉体人間」（肉体と一体になった人）である「エゴ」の立場からすると、分かりにくいのですが、すべては魂の進歩のためであって、「エゴ」の満足のためではありません。

人間は、順調であったり幸せであったりする時は、実はあまり進歩していないのですね。とんでもない方向に向かっていることもあるので、魂はその時わざと病気などを起こさせて、自分を振り返らせるのです。それ故、「行き詰りがありがたいのちゃ。進んでいるからこそ、行きあたり行きつまるのちゃ。省る時与へられるのちゃ。さとの時与へられるのちゃ」（ひふみ神示）。

そのようなわけで、様々な出来事も、魂が「カルマの法則」に従って、自分に進歩の機会を与えるために呼び寄せるのです。「何か迫り来るのは、何か迫り来るものが自分の中にあるからだ。内にあるから外から迫るのちゃ。自分で呼びよせているのちゃ。苦しみの神。因果の神呼んでおいて、不足申している者多いのう。自分で呼びよせながら嫌がってハネ返すテあるまいにのう」（同上）。

しかしながら、エゴが求めるものと魂が求めるものは正反対なので、エゴとしては、何としても自分が支配権を持たねばなりません。その時、魂はエゴの支配にまかせるのですが、エゴが何回拒否しても、繰り返えし気づきのチャンスが与えられます。そして、これ以上生きてても進歩が望めないと見きわめると、魂は突然の事故死や病死などの形で、今回の生の幕引きを行うのです。

A氏 — それにしても、なぜ魂はそこまでしなければならないのか、どうもよく分かりませんね。私なんか、家族がしあわせなら、それ以上のことは何も望みませんけど。

筆者 — Aさんは大変無欲な方ですが、始めに言いましたように、すべては魂の進歩のためであり、その第一が「カルマの返済」なのです。過去の片寄った行為の結果、自分の「エネルギー」のバランスが崩れたのを、これによって、元に戻すわけですね。これが、先ほどの「進歩（進化）の方程式」に外なりません。「ひふみ神示」では、このカルマの負債を「メグリ」と呼んでいます。「メグリと申すは自分のしたことが自分にめぐって来ることであるぞ。他を恨んではならん。」

A氏 — 相手が悪いのに、何で他を恨んではいけないのですか。

筆者 — それに対しては、「神示」はこう答えています。「そなたは自分は悪くないが周囲がよくないのだ、自分は正しい信仰をしてゐるのだから、家族も知友も反対する理由はない。自分は正しいが他が正しくないのだから、正しくない方が正しい方へ従って来るべきだと申しているが、内にあるから外から近よるのだと申してあろうが。そなたは無抵抗主義が平和の基だと申して、右の頬を打たれたら左の頬をさし出して御座るなれど、それは真の無抵抗ではないぞ。よく聞きなされ、打たれるようなものをそなたがもってゐるからこそ、打たれる結果となるのぢゃ。まことに磨けたら、まことに相手を愛してゐたならば、打たれるような雰囲気は生れないのであるぞ。頬を打たれて下さるなよ。生れ赤児見よと知らしてあろうが。」

A氏 — 「神示」は、どうも好きになれませんね（笑声）。

筆者 — この「メグリ」は、この世の「メグリ」というよりも、過去世の「ツケ」と考えて下さい。しかも、「その人間にメグリなくしてもメグリ負うことあるぞ。人類のメグリは人類の誰かが負わねばならん。一家のメグリは一家の誰かが負わねばならん。果さねばならん。善人が苦しむ一つの原因であるぞ。神の大きな恵みであり試練であるぞ。判りたか。愛するものほど、その度が濃い程、魂が入っているのぢゃ。」

人間は本来一体ですから、自分だけよくなれば、それでよいということにはなりません（ここで、A氏の顔をチラッと見る）。例えば、先ほどのワイズ博士の息子の場合などは家族のメグリの返済の一例であり、このような例は無数にあるわけですね。日本の原爆の被爆などは、明らかに国家や民族レベルの返済と言えます。そして、全人類のメグリの返済はと言えば、この重い荷を人知れず負っている者が存在することを知らねばなりません。それが、以前お話しした「ワンダラー」と呼ばれる人たちなのです。

その時に、彼らをご紹介するために、「ナスカの地上絵」で知られるウィリアムソン博士の「神々のルーツ」（増野訳）から、次の言葉を引用しました。「（ワンダラーとは）宇宙には、ふつうの人と異なって遊星から遊星へ、太陽系から太陽系へと移り歩く特殊な階級、集団の人びとがある、という意味である。彼らは宇宙の“煙突掃除夫”なのだ。宇宙のごみすてのような遊星におもむき、墮落した同胞に援助の手をさしのべることが彼らの使命である」（「文芸と思想」64号、「宇宙のワンダラー」）。

とは言え、他の惑星を直接援助することは、宇宙の規則によって禁止されています。言うまでもなく、その星の自然の進化を乱すからです。

D氏 — 高い文明の援助を受けると、進歩が早まるのと違いますか。

筆者 — そうならないことは、地球の植民地の歴史を見れば明らかではないでしょうか。しかも、それは善意ではなくて、列強が世界を奪い合い、あげくの果てに二度の世界大戦を引き起こして、その後は民族の独立戦争や部族抗争へと発展し、今の地球の、このような紛争だらけの状態になってしまいました。しかし、たとえ善意であっても、やはりうまく行かないでしょうね。文明の利器は「諸刃の剣」ですから、使い方を知らねばなりません。

そこで彼ら（ワンダラー）は、地球に魂で来て、同じ地球人として生まれたのです。彼らの仕事は、地球のカルマを自分の身に受けて、それを清算することでした。それが、「地球のアセンション」（次元上昇）の絶対条件だからです。しかしながら、そこは様々な恐怖や怒りや憎悪などの、余りにも低い周波数で覆われた星であったために、使命に目ざめることは困難を極めました。それは最初から予想されたために、「地球遠征隊」は、様々な星からの選りすぐりの戦士で編成されたのですがね。実は地球のアセンションが可能になってから、一万二千年に一回ずつ、六回のチャンスがあったのですが、多くのワンダラーが眠ったままだったために、これまで六回とも「カルマの清算」に失敗したのです。以前に、「かつて地球には、今以上の文明が幾つか存在した」（「宇宙のワンダラー」）と申しあげましたね。

そして、今回が最後の七回目で、絶対に失敗できなかったのですが、これまで積み重なった地球のカルマは余りにも大きく、ワンダラーたちの死力をつくした戦いにもかかわらず、時間が足りないことが判明したのでした。そこで、先ほどから申しあげている「カルマの法則」の破棄という非常手段が取られたのですが、さもないと、地球は「消滅」の運命にあったのです。すべてが進化する中で、地球だけが踏み止まることはできないからです。地球には、これまで多大な犠牲を払ってもらいました。それを、ここで見捨てることができるでしょうか。地球のことを泥団子と思っている人には分からないでしょう。

が、彼女の生きる意志は聞き届けられたのです。

かくして、地球のアセンションが確実となり、私たちもアセンションするかどうかを自分で選択することになりました。最後は魂が決断を下すことになりますので、眠っている人は起こされるでしょう。

A氏 — 先ほどの、個人のカルマの返済のことですけど、悪い出来事や他人の不正な行為が自分の「カルマの返済」になるのであれば、一体何がよくて、何が悪いのですか。

筆者 — よい所に気がつきました。実を言えば、この世の判断の基準となる「善悪」は、永遠の世界から見れば存在しないのですよ。Aさんの嫌いな「神示」によれば、「何も彼も存在を許されているものは、それだけの用あるからぞ。近目で見ると、善ちゃ悪ちゃと騒ぎ廻るぞ。」それ故、「悪も神の御働きと申すもの、悪にくむこと、悪ちゃ。善にくむより尚悪い。何故に判らんのか。」

抽象的で分かりにくいかも知れませんが、例えば、よくある「殺人事件」を例にとってご説明しましょうか。まさかと思うでしょうが、この場合は、一方の「上位自己」(ハイヤー・セルフ)が、自分や家族のカルマの清算ないし、この世からの引き上げのために、相手方に手伝っていただけますかとお願ひし、他方の「ハイヤー・セルフ」も、本人が実際の経験を強く望んでいるので、お手伝い致しましょうと言って、相方の合意の下で行われることなのです。

D氏 — ええっ、本当ですか。

筆者 — 要するに、片方が殺人という重いカルマを引き受けることによって、相手を助けているのですね。その他、いわゆる「医療ミス」なども、よく問題になりますが、相手の医者を責めてはいけないと言われています。

A氏 — (あきれ顔で) そんなこと言ってもですね。まるで、何もしないのが一番いいみたいじゃないですか。

筆者 — ある意味では、その通りなのです。老子は「天網恢恢疎にして漏らさず」と言いましたが、この宇宙には、「宇宙の正義」とも言うべき「カルマの法則」が厳然として存在し、人間が手を下す必要はないのですよ。人間の「復讐心」は最もプリミティブな感情の一つですが、本当は、その必要はないどころか、反対に有害であると言わねばなりません。何故ならば、それが新たなカルマを生み出すからです。それを如実に示しているのが、相方の応酬が次第にエスカレートして行った、これまでの人類の歴史に外なりません。そろそろ気づいてもよいのではないのでしょうか。

一方、聖人たちは、なぜ黙って殺されると思いますか。彼らも決して木石ではなく、私たちと同じ苦しみや痛みを、それなりに感じているのです。しか

し、殺人によって新たなカルマを生じさせることは、何としても避けたいのですね。再び生まれて、その重いカルマの返済をしなければなりませんから。現代の輪廻転生説は、無神論との比較で、人間に希望を与えるものと考えられています。古代インドでは、それが社会の常識であり、しかも宿命論的色彩の濃いものでした。そこでシャカは、繰り返えされる「輪廻転生」から外れて、二度と転生しない「解脱」（モークシャ）を説いたのです。今の言葉で分かりやすく言えば、「地球卒業」ですね。そして、それが本来の個人レベルの「アセンション」に外なりません。

A氏 — では、どんな「愛」の行為も、Cさんの言葉を借りれば「余計なお世話」であって、何もしない方がいいということですか。

筆者 — それは全く違いますから、はっきり区別しなければなりません。誰でも、他人のカルマを、本人に代って背負うことはできませんが、助けることはできるのです。重い荷物を背負ってヨロヨロ歩いている時に、手や肩を貸して支えることはできるのであって、それが「愛」の行為なのです。カルマのバランスをとると言うことは、要するに、自分の嫌いな部分や無視してきた部分を愛することであり、そこから自己投影である他人を必然的に愛することになるのです。世界中が助け合えば、どれだけ良くなることでしょうか。つまり、カルマを生む行為と、カルマを軽減する行為があるわけですね。

かくのごとく、「カルマ」は真に大きな問題なのですが、そのようなカルマを生じさせないためには、最初から生まれなければよいことになるでしょう。そこで、では何故生まれたのかという根本問題が出てくるわけですね。そして、これについて一番明快に答えているのが、先ほどDさんがおっしゃっていたダニエル・ウォルシュ氏の「神との対話」（三部作）なのですが、ご覧になって、どんな感想をお持ちになりましたか。

D氏 — 最初の一冊だけですが、部分的にはかなり共鳴を感じました。しかし、全体としては少し難しかったという印象ですね。

筆者 — 確かに、そうかも知れません。しかしながら、私としては、すべての方にこの本をお勧めしたいと思います。特に、「マスター志望者」には、「現代のバイブル」になるのではないのでしょうか。前論では、ごく簡単に、こうご紹介しておきました。「（人間は）本来は「神」ですから、始めはすべてを知る存在でしたが、まだ『経験』がありませんでした。そこで、物質世界の『経験』を通して、本当に知ることを望んだのです（D. ウォルシュ著「神との対話」など）」。

これが私たちが生まれた本当の理由なのです。そして、その「経験」について、「神」はこう説明しています。「すべての出来事、すべての経験には、機

会を創出するという目的がある」(吉田訳「神との対話②」)。つまり、「出来事も経験も、あなたに引き寄せられる機会で、意識を通じて個人的、集団的に創り出される。意識は経験を創り出す。その意識を、あなたがたは向上させようとしている。機会を引き寄せるのは、**あるべき自分**を創り、体験するため、**あるべき自分**とは、いまのあなたより高い意識をもった存在ということだ」(同上)。それがどういう意味かは、もはや明らかですね。

そこから「神」は、全体をまとめて、このような言葉を繰り返して伝えていきます。「あなたの身に起ったことはすべて招き寄せられたのだ。経験して知ろうと選択したことを経験して知るため(だ)、あなたが**自分自身**についていた最も偉大なヴィジョンの、最も壮大なヴァージョンを経験するためだ」(続編の「神との友情 上」)。恐らく、人間の指針として、これ以上のものはないでしょう。

以上で見たように、かくも大切な「経験」なのですが、実際に体験すると、最初は調和のとれた「生命エネルギー体」である「魂」のバランスが、どうしても崩れるのですね。そのアンバランスが固定したのが、いわゆる「カルマ」であって、魂がさらに向上するためには、「進歩の方程式」が示すように、この「バランス」を取り戻すことが何より重要になります。それが「カルマの返済」に外なりません。

A氏 — 頭ではまだまだ納得したわけではありませんが、何となく少し分かりかけたような気がします。有難うございました。最後にもう一つ、この前から気になっていたことがあるのですが、ここでお聞きしてもいいですか。

筆者 — 頭では分からなくとも、直観で分かれば、それでよいのです。そもそも、頭で分かることではなく、「意識の拡大」の実践の中で少しずつ学ぶことなのですから。もう一つのこととは何ですか。

A氏 — 前回の最後に、世界は自分の心の鏡であり、いやな相手とは、自分の見たくない部分を写した鏡であると聞いて、そんなことは有りえないと思いましたが、妙に気になりました。先ほども、他人の批判は自己投影だとおっしゃいましたね。実は、ここだけの話ですが、心の中では昔から許せない人がいるのです。しかし、それが自分自身だなどとは、絶対に思いたくありません。どういうことなのか、もっと易しく、誰にも分かるように説明していただけますか。

筆者 — (笑いながら) もともと易しくないことを、誰にも分かるように説明することなどは至難のワザですよ。しかしながら、イエスのように喩え話を使って、やるだけやってみましょう。

映画で有名な「寅さん」は、どなたもよくご存知ですね。彼は普通の大人と

違って、いつまでも「子供ごころ」をなくさない所が人気の秘密かと思いますが。さて、ある日、彼の実家のダンゴ屋に某マドンナが訪ねてきた時のことですが、お客の彼女に、先にお風呂に入ってもらうことになりました。その時彼が、傍にいた「オイちゃん」（叔父）を肘でつつくようにして、「やだね、スケベなこと考えちゃって」と言うと、「オイちゃん」はポカンとした顔をしていました（笑声）。いいですか、私たちは皆、この「寅さん」なのです。男も女も「寅さん」なのです。人間は皆「寅さん」なのです。くれぐれも誤解のないように申し上げておきますが、「女のストリップ」の話などをしているではありませんからね。

最後に、Dさんも何かありましたら、どうぞ。

D氏 — では、思い切ってうかがいますが、「新しい地球」になるのは何時なのか、例えば五十年後とか百年後とか、大ざっぱでもいいですから、知ることができますか。

筆者 — 本当は、変化は既に始まっているのですよ。そして、誰もが分かる形で、はっきりした変化が起こるのが、今から八年後の二〇一二年と言われています。正確に言えば、十二月二十二日ですが、これは複雑なマヤ暦の「最後の日」として知られています。詳しいことは、「フォトン・ベルト」の研究家の渡邊延朗氏の著書（「デイ・オブ・オメガポイント」など）をご覧ください。

では最後に、親愛なる「寅」の皆様、「絶滅危惧種」の指定は外されましたので、あまり「奮闘努力」しないことを祈ります。

二〇〇四年八月